

茨城県内調査に関する報告と予備的考察

根橋 正一・東 美晴・高橋 巖根

1. 北茨城調査について

(1) 北茨城調査の概要

高橋 巖根

この調査は、社会学部に所属する3名の教員（根橋正一・国際観光学科教授，東美晴・国際観光学科教授，高橋巖根・専任講師）によって2008年9月から開始された。その後，2009年度より新たに1名（津村修・社会学科教授）が加わったが，これまでのところ当初の3名での調査が先行しているため，この特集ではこの3名によって報告・考察を行うこととする。

この調査の目的の一つは，本学社会学部の教員が，本学が立地する地域社会（茨城県地域）を対象として共同研究を行い，その成果を提示することによって，社会学部活性化の一環とするということにある。社会学が危機に陥っていると言われる今，全国の社会学部の人気も振るわない。1980年代の社会学は，明らかに時代をリードする学問領域のひとつであったが，現在は往時の勢いは見られない。しかし，視点を変えてみれば，別の可能性もないわけではない。少し前までの日本では，経済的なグローバル化に立ち遅れたとの反省から，経済回復優先の政策が採られた。その結果，社会的な格差が増大したというのは周知の事実であるが，そうだとすれば，昨2009年の政権交代とは国民がこれまでの経済優先策に対する修正を求めたものと捉えることもできる。今後の実際の政治の流れがどのような方向に向いていくかは未知数だが，経済重視とともに人間社会の問題に対する対策についてもバランスよく配慮することが求められるという必要性は根強く残るであろう。この共同研究が対象としている地域社会の問題も，そうした人間社会の問題の一つと言える。

この調査の対象となっているのは，主として茨城県北茨城市大津港地区（行政的には，同市大津町の一部）である。同港は，北隣にある平潟港と並んで茨城県北地域を代表す

る漁港であり（ともに行政的には、利用範囲が全国的な港である「第3種漁港」に属する）、江戸時代には水戸藩領に属した伝統ある港である。大津港では、昔はカツオ漁が行われていたが、その後、巻網漁業に転じ、イワシ、サバ、マグロなどが獲られていた。しかし、現在はシラス漁がメインであり、小型船40隻が操業している。そのほか、巻網船6隻、15トン未満の小型巻網船2隻が、八戸から銚子までを寄港地とする海域で、イカ、サバ、イワシを獲っている（燃料の関係で、最も近い港に水揚げするため）。また、同港周辺には、シラスなどの小魚を中心として水揚げされた海産物を干物として加工する加工業があり、漁協とは別に、加工業の組合も存在する。

文化や観光に関する面について言えば、大津港では、江戸時代中期から続くと考えられる伝統行事で奇祭とされる「御船祭（おふなまつり）」が行われている（この祭りに関する現存する史料は明治以降のもののみ）。御船祭は現在5年に一度行われており、最近では2009年の5月2・3日の両日にわたって行われた（昔は、毎年あるいは3年の一度行われていたこともある）。御船祭とは、祭りの主社である佐波波地祇（さわわちぎ）神社の祭神を御輿に乗せ、町内の西外れまで移動させた後に、別に移動させておいた祭り船に乗せて町内のメインストリートを曳いていくというものである。祭り船には、ほかに祭りを司る神官3名や歌担当の者（「水主（カコ）」と呼ばれる）、演奏担当の者（主として小中学生）も同乗する。人間数名分の長さをもち色とりどりに飾られた船が陸上を進むという、壮麗な奇祭である。この祭りは近年、観光的にも大きな注目を浴びており、本祭には10万人規模の人出が集まっている。

祭りに使われる木造船は、以前は普通の時期にはしまわれていたが、2007年5月に祭り船を主要展示物とした資料館を開館させ、常時見学できるようにした。資料館は市が建設し、漁協が管理、食堂と物産館は漁協が建設した。資料館を含み食堂・物産館を併設する複合施設「よう・そろー」は、ブルー・ツーリズムの中核施設と位置づけられている。また、同港では、ブルー・ツーリズムの関連事業として、しらす引き網漁の体験を行っている。1隻で、大人12名、子供なら24名まで乗せることができる。ここでいう「しらす」とは通常期はカタクチイワシの幼魚（黒潮系）のことをいうが、3-5月に限ってはコウナゴ（親潮系）を捕獲している。漁の時期は、1月を除く一年中である。売り物の生食は獲れた当日のみ（翌日になるともう食べられない）で、1キロ2-3千円と高価で取引される。漁業体験は2007年5月に開始したが、12月までの8ヶ月で体験者は702人とどまっている（2008年1-3月はゼロ）。当初は学生の団体が主であったが、最近では農協観光などによりツアー化しつつあり、民宿分泊の形をとっている⁽¹⁾。

次に、これまでに行った調査の経過についてまとめておく。

第1次調査（2008年9月）：大津港・平潟港などを下見的に調査するとともに、北茨城市役所産業農村部水産振興室の職員から、北茨城市の概要や大津港地区に関する話を聴取した。また、大津港漁業組合の組合長とも面会し、大津港で行われてきた漁業のあ

らましについて話を聞いた。

第2次調査(2009年2-5月):2009年5月に行われた「御船祭」について、その準備段階から調査を行った。御船祭保存会会長をつとめた加工業組合長と面談を行ったうえで、約2カ月にわたる祭りで披露される歌や楽器の演奏の練習、直前の町内の飾り付け、「海上渡御」(祭り船を資料館から出し、祭りの出発点となる地点に海上を経て移動させること)、宵祭と本祭の全プロセスを調査した。

第3次調査(2009年7-8月):毎年8月の盆の時期に行われる「じゃんがら念仏踊り」に関する調査を行った。「じゃんがら念仏踊り」とは、北茨城市北部と福島県いわき市に伝わる郷土芸能(一般的には、いわき市のものが有名)で、数名の集団でその年に新盆を迎えた家を回り、鉦・太鼓を鳴らしながら踊りを披露するという、いわゆる念仏踊りの一種である。「じゃんがら」とは、鉦の音を擬した名称であるとされている。北茨城市北部では、いくつかの地区で有志による保存会が組織されているが、中でも大津港地区の保存会はレベルが高く、全国的な伝統芸能のイベントにも参加している。

なお、2009年度の調査(2009年4月以降)は、本学の共同研究のための助成金を受けて行っている。

上記に説明したとおり、これまでの調査は主として、大津港地区で行われている祭りを対象として行ってきた。これをもとに、来年度以降は、以下の二つの方向性において調査をより発展的なものにしていくことが考えられる。一つは、これまで調査してきた祭りの「非日常」に対して、地区の日常生活、とくに産業面に焦点を当てて調査することである。この地域の産業は、主に漁業と関連の加工業や船・漁業用品の修理・調達などであるが、それ以外にも日立グループなどの地元の製造業関連で働いている者もいる。もう一つの方向性は、対象地域を拡げることである。これは一つには、日立以北の茨城県北地域と隣接するいわき市地域を一つの広域的な地域とみて、それにおける産業や文化の要素を調査していくことである。そのほか、比較対象となるような別の地域をとりあげ、調査していくことも予定している。

注

(1) 以上、2008年9月10日、北茨城市役所産業農村部水産振興室の職員からの聞き取りに基づく。

(2) 常陸大津の御船祭—その文化的意味の変遷—

東 美晴

はじめに

大津の御船祭は現在、5年毎に5月の2日、3日に行われている大津港地区の鎮守社、佐波波地祇神社の祭礼である。筆者たちは2008年9月から2009年8月にかけて、北茨城市大

津港地区においてインタビューおよび参与観察を重ねる形で調査を行ってきた⁽¹⁾。本論は、そのうちの御船祭に関するデータを中心に、『北茨城市史』の記述と照らし合わせながら一つの地域文化として御船祭を記述しようとするものである。その方法は次の通りである。

祭りとは表出の文化である。その象徴表現を通して表出させるものは、多面性を持っており、必ずしも一つの解釈の中におさまるものではないであろう。だが、ここでは、まず、幕末から近代に至る営みの中で構築されてきた大津港地区の社会構造の縮図として、その解釈を試みる。次に、現代における社会生活の変化は、祭りのような共同体の行事に対し、その社会的意味づけに変化を要求する。御船祭の場合、昭和50年(1980)には県指定無形民俗文化財に指定され、昭和55年(1985)に、国選択無形民俗文化財に指定されている。これをもって、御船祭は海上安全と豊漁を祈願して行われてきた漁村の鎮守社の祭りから、北茨城市民が守るべき歴史性を負った文化財へとその位置を変えてきた。これによってその意味もまた、閉じた大津港地区という地域における社会統合のシンボルから、北茨城市民のアイデンティティの源泉の一つとなりうる文化伝統へと位相を変えることになる。その変容の過程を記述する。

1. 2009年の御船祭

御船祭については、北茨城市史の上巻に以下のように記述されている。

大津村の佐波波地祇神社(大宮大明神)は、古来より海上守護の神社として崇敬され、清められた船に神輿を安置して行われる「御座船の神事」(御船祭)は、海上安全と豊漁を祈願して行われた。

すでに江戸時代には端を発していたと伝えられるこの祭りの特色は、神輿を安置した「御座船のお浜下り」の祭事が、神船の陸上渡御であること、古くからの「お船歌」が伝承され、今なお歌い継がれていることである。神船は紅白の幕、毛やり、五色旗で飾り立てられ、その胴には海の幸や神楽面が描き出される。神官、歌子、囃子方が乗り込んだこの神船を、数百名の若者が祝い綱をもち、序破急の御囃子に合わせて曳く。

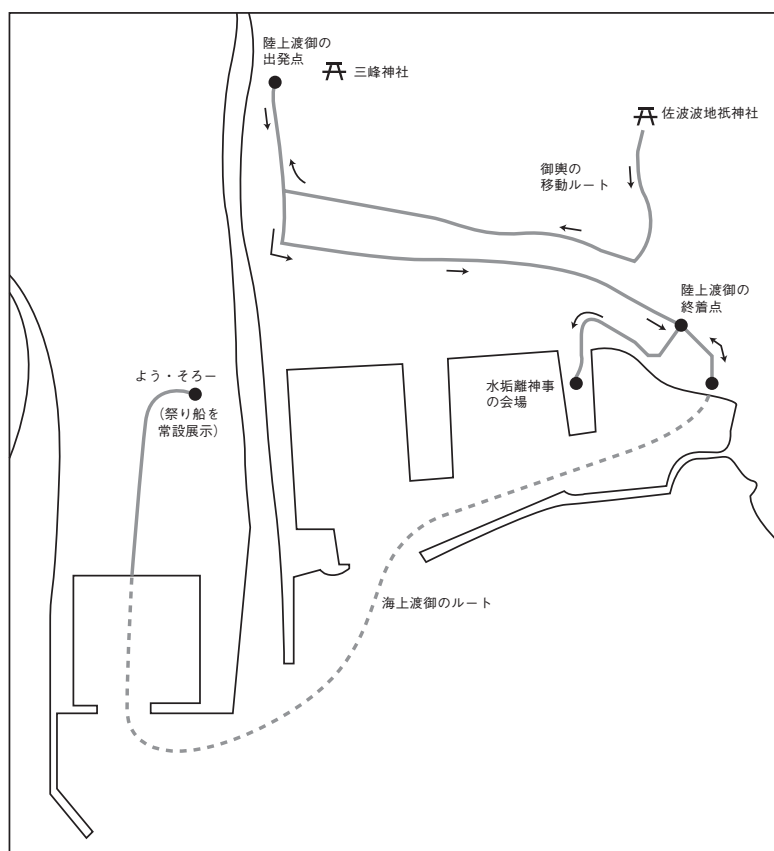
当社の祭礼に御船飾りて歌子そろい
 はやしにつれて先綱を曳くあまたの氏子衆
 エン鎮座をいさめ奉る巫女は神楽の鈴の音も
 さえて音する波すずみ
 エンエン栄えるヨウ浦の祭りごとヤランヤー

これは「当社の祭」と呼ばれるお船歌であるが、祭りのようす雰囲気を示してあまりある。昭和50年6月25日、大津の「御船祭」は県指定無形民俗文化財となり、同55年3月1日、国より記録作成等の処置を講ずべき無形民俗文化財に指定された(市史上, 1988, 652)。

2009年の御船祭りは、御船祭保存会主催で、漁業歴史資料館「よう・そろー」に保管・展示される新造船を用い、5月2日、3日に開催された。これに先立ち、4月26日に「よう・そろー」から船が出され、御船置場に移された。また御囃子、お船歌の練習、祭りのための諸々の準備が2月から始められた。

5月2日の宵祭りではまず御船の陸上渡御を行う。東の御船置場から街中を通り、西の御船置場までの渡御である。この時、御船にはまだ神輿は乗せられていない。午後1時花火があがるとともに、御船の渡御が始まる。御船を大きく何度も揺すり、タイミングを見計らい祝い綱を引く。その瞬間、御船がソロバン（写真5参照）の上を滑り始める。祝い綱を持つ人々はその時にダッシュする。そのダッシュの距離が、御船が進む距離となる。こうして何度もダッシュを繰り返し、御船がすすんでいく。祝い綱が長い。船の近くには自前の祭り衣装の男たち、船から離れるにつれ中学生、小学生、就学前の子供たちと母親など力に応じた位置で祝い綱を持ち、街じゅうの人が引く。また、夜8時、佐波波地祇神社にて、翌日に神船に載せる神輿に御魂移しの儀が行われた。

翌3日、朝9時、まず人々は佐波波地祇神社に集まる。一通りの神事後、神輿が出される。神輿は厄年の男たちに担がれ、子どもたちの御囃子の先導で、神社を降りてい



く。そして昼、西の御船置場で御船に乗せられる。これによって御船は神船となる。午後、神輿を乗せた神船の渡御、この日は多くの観光客が集まる。ただ見物する者、写真を撮る者、綱を引く者を含め、12万人の人出があったと後に報道されている。夕方、東の御船置場までの神船の渡御を終えると、神輿は下され、港にまで担がれる。そこで潮垢離神事が行われる。神事が終わると、ようやく神輿は名残を惜しむように神社に戻る。

2. 歴史のシンボリズムとしての祭り

(1) 御船祭の役割分担

祭りの担い手である保存会は東、中、西の三地区の世話人、水主、御囃子から構成される。

水主と御囃子は渡御の場面において船に乗る人々である。水主はお船歌を伝承し、神事の場面においてそれを奉納する。また、船上において、その飾り付け、海上を移動させるときにはその操作など、船の世話をする人でもある。御囃子の中心は男の子たちである。小学生から中学生の男の子たちは、女物の着物、花笠に化粧を施し、小太鼓、大太鼓、鉦を叩く。それに師匠と数名の笛を担当する大人がつく。

世話人は準備から始まり、祭りを無事に遂行することが仕事であり、道路使用に関する警察への書類の提出から、街の飾り付け、御船渡御時の先導や安全確保、翌日の清掃に至るまで、何から何まで分担して行う。

保存会会長のM氏によれば、大津の町内は西・東・中の3町に分かれており、世話人はそれぞれ23名で構成されているという。現在の西・中・東の世話人集団の構成は、東には勤め人が多く、中には自営業者、西には漁業関係者が多いともいう。なお、西・中・東それぞれの世話人集団は、頭取、副頭取、事務局、会計他で構成されている。御囃子についても、以前は西・中・東のそれぞれに一つずつあったが、今は一つの団体になっている⁽²⁾。

また、水主は、現水主師匠のS氏によれば、小型船漁師が多いという⁽³⁾。水主はお祭りの時には漁師から武士に代わる。すなわち、袴、袴で、帯刀が許されるため、水主師は半武士であるとも表現される⁽⁴⁾。

これについては、実際の祭りにおいて、袴、袴の服装で参加するグループには2つがあった。一つは現在S氏が師匠となっている御船に乗り、神事の際にお船歌の奏上を行う水主たちであり、もう一つは鉄家、鈴木家の人々である。宮司のI氏によれば、佐波波地祇神社は当初鉄家、鈴木家の氏神であったとも言われているという。そして、祭りに際して、半武士の水主師は御仮屋に泊まり、神輿の警護を行ったという⁽⁵⁾。鉄、鈴木両家の人々は既に大津港地区から離れているが、今回の祭りにおいても招かれ、半武士の服装で夜通しの神輿の警護を行っていた。

祭りの中でそれぞれの集団に付与された役割には、大津の歴史が凝集されている。次節以降、それをみていく。

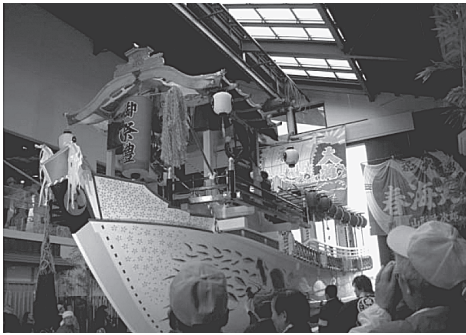


写真1 4月26日 漁業歴史資料館「よう・そろー」から御船を出す



写真2 4月26日 「よう・そろー」から出した御船を御船置場に移す



写真3 5月2日 御船渡御の様子



写真4 5月3日 神船渡御にて、祝い綱を引く人



写真5 御船を動かすために敷かれるソロバン



写真6 佐波波地祇神社から降ろされた神輿。5月3日の渡御では、この神輿が御船に乗せられ、御船は神船となる



写真7 御船に神輿を載せる。浴衣に袴姿で作業をしているのは水主たちである。

(2) 佐波波地祇神社と鈴木家、鉄家

大津港地区の佐波波地祇神社の由来については、北茨城市史には次のように記されている。

創祀年代は未詳。『水府志料』に「鎮座年月詳ナラズ。疑フラクハ齊衝・天安ノ間ナランカ」とあるが根拠はない。初め大津の沢山に鎮座したが、元禄年中（1688～1703）、徳川光圀が大宮大明神と改称したという。大宮六所明神というのが近世初頭の本래の社名で、その後式内社に擬せられたので、佐波波地祇神社と称し始めたとも言われている（市史上, 1988, 230）

いつ頃から佐波波地祇神社と呼ばれるようになったかについては、「享保12年（1727年）4月の棟札には、「佐波波地祇神社」とみえ」とされており、ここから18世紀初頭には「佐波波地祇神社」と呼ばれるようになっていたことがわかる（市史上, 1988, 228）。

ちょうどこの頃の大津は、漁村として盛況を見せ始めていた。やはり市史に従えば、宝暦13年（1763）の記録には、大津村の漁船63艘とある。さらに、19世紀初頭の文化年間には「漁業ヲ以テ渡世ノ第一トス」と言われるようになっていたという。また、文政10年（1827）の小宮山楓軒による記録には、「大津村は漁業繁栄、船80艘、地引網52段あり」とあり、さらに「船庄屋鈴木伊左衛門の家は大きくはないが土蔵もあり、鯉船2艘、その外流網の船、地引網も所持して家は頗る富んでいる。当時は鰯が不漁であるが、それでもすでに380両を得ている。その家を伊勢屋と号している」と記されている。同様に、同時期の水戸藩の学者青山延寿の記録には「社（佐波波地祇神社）の下には人家が並び、煙や火の色がにぎやかで、実にわが藩の一小都会である」記されているという（市史上, 1988, 529）。

ところで、上の小宮山楓軒の記述において目を引くのは、「船庄屋鈴木伊左衛門」の名である。「佐波波地祇神社は当初鉄家、鈴木家の氏神であったとも言われている」という伝承の一つの由来として、江戸期において鈴木家が大津村の浜庄屋であったことをあげてもよいであろう。

一方、鉄家については、市史にその名が登場するのは鉄伝七からである。

大津においては、近世の初頭より「もぐり」による鮑漁が行われていたが、天保年間（1830～44）に仙台泊村の善四郎によって掛具の方法が伝授されることにより盛んになったという。鉄伝七の名が市史に最初に登場するのは、文久元年（1861）にこの鮑を用いた乾鮑を考案するという記述である（市史下, 1987, 477）。それから、明治15年（1882）には、鉄庄重らとともに興業社を起し鮑缶詰製造事業に着手する。その半年後、健康を理由に隠退した鉄庄重からそれを引き継ぐ。さらには、明治19年には上野公園の大日本水産共進会に明鮑（わたを抜いて作った乾鮑）を出品し褒状を受けるなど、

大津における水産品の品質向上を図る（市史下, 1987, 467）。そればかりではなく、明治19-23, 36-40の2回に渡り、県会議員に選出されている（市史下, 1987, 820）。以上のような事績から、鉄伝七が大津村の産業振興に大きく貢献した立志伝中の人物であることがうかがわれる。また、幕末に既に鉄という姓をもっていたという点から、鉄家が名字帯刀を許されるような地位にあったことも想像に難くない。

なお、乾鮑、鮑缶詰など鮑を用いた水産加工品の製造には、当然原料となる採鮑量の向上が必要である。採鮑量の向上には、潜水器の導入があった。これは、横浜において沈没船の引き揚げに潜水器を用いるのを見た鈴木常雄が、明治12年潜水器を採鮑に応用することを始めたことに困っている。鈴木は潜水器を購入し、潜水夫を雇い入れ、これを始めたという（市史下, 1987, 478）。

佐波波地祇神社は鉄家、鈴木家の氏神であったかどうかはさておいて、鈴木家、鉄家が、江戸期において大津村の中で特別な位置におかれる家柄であったことは事実であろう。それによる富の集積が、鉄家、鈴木家の明治期における採鮑漁を中心とした産業形成の経済基盤となったこともまた想像できる。そして、それが半武士の伝承として、祭りの中において現在にも伝えられているのであろう。

（3）大津近代水産業と御船祭

祭りにおける一つの袴、袴姿の集団、鉄家、鈴木家については、その由来を確認することができた。次に、祭りにおける他の集団、すなわち水主、各町の世話人について、大津港地区の水産業の歴史を紐解くことを通し、その位置づけを確認していくこととする。

① 大津港地区における水産業の近代史

幕末期より大津港地区の漁業は一本釣りによる鰹漁と八坂網による鯛漁が主流をしめていたとされる（市史下, 1987, 466）。明治期にはこれに鮑漁が加わることとなるが、ここに大きな貢献を果たしたのは、先述の鉄伝七および鈴木常雄であった。

さて、ここからの焦点は鰹と鯛である。明治期の大津港地区では鯛よりも鰹の方が、漁獲高においてまさっていた。たとえば、明治35年の漁獲高では鯛6,750貫（1,350円）に対し、鰹18万40貫（9万20円）であった。また、大津港地区では水産製造品への加工も盛んであり、その中でもやはり鰹が群を抜いていた。同じく明治35年の統計では鰹節の産額は17万6,500貫（7万7,660円）であり、2位の乾鮑2万350貫（1万5,262円）を大きく引き離していた（市史下, 1987, 469-470）。

しかし、鰹の漁獲高は明治末頃からしだいに減少し、魚戸数も減っていくこととなる。たとえば、明治22年（1889）と明治44年（1911）の鰹漁を営む魚戸数を比較すると、40%の減少があったという（市史下, 1987, 471）。この傾向にさらに追い打ちをかけたのは昭和の恐慌によってもたらされた魚価の低落であり、その影響は魚戸にとどまらず水

産加工業者にもおよび、多くの失業者や出稼ぎ者を出したという（市史下、1987、472）。

これに対し、鰯漁は明治20年代に揚繰網漁法、その後、二艘巻揚繰巾着漁法へと漁法の改良が行われ、それに伴い漁船の大型化も進んでいく。昭和に入ると、揚繰法機械化など漁労技術の改良も進む。こうした着実な近代化によって、徐々に漁獲高を伸ばし、昭和に入ると大津港地区における、その首位を占めるようになる（市史下、1987、469-472）。鰹漁の不振の一方で、鰯漁は昭和の恐慌下にあっても毎年のように大漁の記録が更新され、戦争勃発後の昭和17、18年まで、活況を呈する。これと連動し、煮干、メ粕などの鰯加工も多いにぎわったという（市史下、1987、472-473）。

しかし、鰯漁の戦後は厳しかった。戦前大漁に沸いていた鰯は、戦後、不漁におちいった。また、戦後のさらなる漁業の近代化、すなわち漁船の大型化、鋼船の導入、新技術の導入等においても出遅れ、鰯揚繰を行う他地域との競合の中で活力を失っていく（市史下、1987、665-666）。

ところで、船団を組み、多数の労働力によって支えられる鰯揚繰漁のよう形態の漁業は資本制漁業と呼ばれる。大津港地区の場合、当時、一か統平均70人の労働力が必要とされていた。戦前には12か統が稼働し、敗戦時には10か統が残されていた。しかし、昭和29年には実働4か統にまで激減したという。というのも、鰯漁は地元の雇用者のみで操業されていたのではなく、その3割が県外（福島、宮城など）からの労働者であった。彼らは漁期を船主の番屋で過ごすのだが、この時期、他港のより設備のよい船、より漁獲高が期待できる船に移っていき、鰯揚繰操業のための労働力確保もままならなくなったという（市史下、1987、667-668）。

昭和20年代後半、鰯漁が衰微していく中で、再び小型船業者が増加する。これは他地域におけるカツオの一本釣りの好調を受けてのことであった。しかしその漁獲物は、鯛、いなだ、すずき、ぶり、たこなど、季節ごとの活魚に変化している（市史下、1988、668）。

少し鰹漁と鰯漁の関係を整理する。

鰹漁は基本的に小型船であり、いわば自営業に近い形態である。明治末頃から漁船の動力化などの近代化進められるが、戦後すぐの頃でさえ、まだ伝馬船に2馬力程度の動力を付けたものがほとんどであったという。昭和28年頃には、1トン程度の動力船も新造されるようになるが、やはり小型船である（市史下、1987、668）。

一方、鰯漁は大型船が必要であり、設備投資にも大量の雇用者を必要とするが、その水揚げも大量である。戦後の復興金融金庫の貸付によって建造された船の記述が市史にある。それは、「そのうち1艘は30トン級の底曳船、もう1艘は140トンの遠洋かつお・まぐる網船」とあり、上の記述とを比較すると小型船と大型船の規模の違いがよくわかるとともに、当然漁の規模が違うことも理解できる。

ところで、昭和26年頃、大津の漁業経営形態の90%をこの小型船業者が占めていたとされているが、この比率は昭和60年においてもあまり変化がない。昭和60年では、経営

形態では施網業者（主としていわし巻網）9に対し、小型船業者は97であるが、労務者数では施網業者が408人に対し、小型船業者は142人となっている。もっとも、昭和60年における施網業者1人における平均雇用者数は45人であり、昭和20年代に比べると、いくばくかは少なくなっている（市史下, 1987, 668, 671）。

いわば、大津の漁業は鰯と鯛に象徴される形で二分されてきたのであるが、当然、大規模経営の鯛漁が多ければ多いほど、漁業が栄えることになるのである。それゆえ、当時、いわし巻網の衰微が与えた影響は小さくなかった。実際、いわし、さんま、さばを原料とした水産加工業では、戦後昭和24年（1949）に大津水産加工業協同組合が発足するが、深刻ないわしの不漁により転業、廃業が相次ぎ、昭和32年に一旦解散し、大津港水産加工業協同組合として再発足するという経緯をたどっている（市史下, 1987, 672）。なお、鮑については、明治後期を最盛期とし、その後下降の一途をたどったとされている。また、鉄伝七にひきつがれた鮑缶詰工場も、明治40年に大日本水産株式会社に譲渡されている（市史下, 1987, 487）。

さてその後である。市史には昭和30年代の漁業の状況に関する記述はないが、この時期に大津港の港湾整備が進められたことが記されている。すなわち、昭和26-37年にかけて第一次、第二次整備計画に基づき大津港の港湾整備が行われ、昭和37年には第三種漁港の昇格指定を受ける。それにもかかわらず、同時期、急激な漁船の大型化、利用漁船の増加、漁獲量の増大にともない、すでに港は飽和状態にあったという。そのため、翌38年から第三次整備計画による拡張工事が着手されるというものである（市史下, 1987, 675）。

その結果、昭和40年代に関する記述は、鯛揚繰網漁を行う施網業者が大津漁業の中核をなしていることを示すことから始まる。鯛巻網船は大型の鋼船へと切り替えられ、その漁場もより遠く北太平洋へと出ていく。港には、より大漁の水場に対応できる製氷工場などの設備が整備される。また、流通も変化し、大津漁協の販売部門によって卸売市場が開設され、小型船業者中心の漁獲物である活魚も取り扱われるようになる。こうして、近代化された漁業の時代が到来するのである（市史下, 1987, 670）。

しかし、昭和60年（1985）には、世界的な水産資源枯渇や、グローバルな競争の中で鯛加工製品の輸出不振など、次の深刻な問題に直面することになる（市史下, 1987, 671）。

② 鰯と鯛と祭り

先述した鉄家、鈴木家は祭りに招かれこそするが、既に大津港地区の住人ではない。現在の祭りの主たる担い手は、西・中・東の世話人集団、水主の集団である。彼らにしても、すべての人々が大津港地区に居住しているわけではなく、現在は隣接する関南地区に居住する人も多い。というのも、とりわけ鯛加工業者においては、干場を確保す

るために、周辺地区に多く土地を買った時期があるためだという⁽⁶⁾。それでも彼らは、もとの居住地の町内会の世話人集団にメンバーシップを持っている。さらに言えば、現在では、西町・中町・東町という町名は消失している。いわば、これらの祭りにおける集団は過去の区分に基づいて維持されているのである。

ところで、水主の集団は、西・中・東町内会区分に基づいた世話人集団からは独立した集団であるとともに、それと同等の地位を持っている。実際、それは神事における玉串奉納の場面において、西、中、東の代表の次に、水主師匠が自分たちの集団を代表して行くことに現れている。この水主たちはお船歌の伝承者であり、それを佐波波地祇神社の神に奉納することを役目とする人々である。

この集団のメンバー構成について、水主師匠のS氏は、水主には小型船の漁師が多いという。水主には師匠の下に副師匠が3人いるが、その一人I氏も、「水主になるのは、昔は漁師だった。今も皆漁業関係者が多い」という⁽⁷⁾。

また、S氏が水主に入った経緯は、父がやはり水主であったことによる。入ったのは23歳か24歳の頃であり、父が船の上で歌っていたために、お船歌は自然に耳に入っていたという。S氏が水主に入った当時は、水主の集団も西・中・東に分かれており、中町の水主は23人あったという。S氏が入った当時、町の人もあったが、小型船業者がそのうちの12~13人を占めていたという。現在40代の、一番若い副師匠であるS氏も、祖父がかつて水主の師匠であったという⁽⁸⁾。

こうしてみると、水主は、もとは小型船業者を中心に、世襲で構成されてきたことが理解できる。なお現在、水主の歌の練習は公民館で行われているが、かつては水主師匠の自宅に集まり行われていたという。副師匠S氏の祖父が師匠であった時代はまだその時代であり、S氏は子どもの頃の記憶としてそれをもっているとのことであった⁽⁹⁾。

ところで、前節において、大津の水産業の近代における変化について、市史の記録をもとに簡単にまとめた。そこから見出されたものは、大津の漁業史は、鰹漁・鯛漁・鮑漁の歴史であった。鮑漁とそれに付随する産業の担い手の中心は鉄家・鈴木家であったが、鮑漁の衰退とともに大津から去っていく。鰹漁とそれに付随する水産加工、すなわち鰹節の生産は、明治期の大津を支える産業であったが、明治末から昭和初期にかけて大規模な資本制漁業である鯛漁にとってかわられていく。それでも、鰹漁を元型とする小型船漁業は一貫して継続されてきた。言い換えるならば、小型船業者は大津港地区においてある一定の位置を占め続けてきたのであり、その祭りにおける表出が水主であるといえよう。

さて、鯛漁とそれに付随する産業の担い手たちは、祭りの中でどのような位置を占めてきたか、次にそれをみていく。

西・中・東それぞれの町の世話人集団は、実務上は頭取がその責任者である。しかし、その上にそれぞれ総代がおかれている。

保存会長のM氏によれば「総代は船主である」という。祭りにかかる費用は基本的に寄付で捻出されるが、総代はおよその金額として20万円程度であるという。他の大口の寄付は漁業組合、およびその他の組合など漁業関連の組織によっているが、総代の寄付は個人としては極端に大きな金額である⁽¹⁰⁾。これは、総代が船主であるといっても、大規模な資本制漁業の経営者であることを意味している。このようにしてみると、船主としての鰯巻網漁の経営者は、祭りの施主の位置に置かれてきたことがわかる。

なお、調査中に出合った人の中には、世話人の組織に名を連ねていない船主もあった。町の飾り付けを見学中に出合ったY氏は大型船の船長であるが、「船には東も中も西もない。各船から5人ずつ祭りに出ている。寄付5万円で提灯。提灯には寄付者の名前が書いてあり、祭が終わると記念にくれる」と語ってくれた⁽¹¹⁾。ここではむしろ船の独立性が強調されているが、やはり施主として寄付をすること、祭りに人を出すことが、船主の祭りにおける役割であることがわかる。また、現在は、祭り費用の捻出にあたり、市民に1年500円の積立をしてもらい、それを5年続けることで祭り費用の基本的な部分の寄付を集めているとのことである⁽¹²⁾。しかし、以前は祭りの開催にあたり施主の役割は非常に大きなものであったのだろう。

世話人について少し補足しておく。

現在の保存会長M氏は調査当時70歳であったが、22歳の年に中町の世話人として祭りに関わったのが、その最初であるという。その経緯は「最初は一旦断ったが、親がやっていたので入れと言われ、入った」ということであり、また「祭事に関わるのは、親がやっていたからなど、世襲が多い」ともいう⁽¹³⁾。M氏の稼業は鰯の加工業であり、祖父の代に財をなしたという。また、中町の現頭取は燃料屋、中町世話人の最も若いメンバーであるK氏はやはり世襲で世話人となったということであるが、その家は建築業を営んでいる。M氏によれば、中町のメンバーには自営業者が多いということであったが、それなりの経済力を持った町の経済活動の担い手であることが一つの要件であったのだろう。

ところで、世話人の祭り衣装は場面によって異なる。神船渡御の場面では、そろいの浴衣であるが、その下にそれぞれに意匠を凝らした単衣を着こんでいる。赤い女物の衣装もあれば、背中に富士や龍、虎を刺しゅうしたものもある。片肌脱ぎになった時に、下に着込んだ着物の華やかさや派手さが映える。世話人たちは、このようにして自分の粋や威勢を祭りの中で表現してきたのである。

その一方で、祭りにおいて揃いの祭り衣装を着て、祝い綱を引くグループを幾つか見かけた。祝い綱を引く者の祭り衣装は基本的に白い上着と白い股引であるが、その背中には、様々な意匠のプリントが施されている。同じ衣装の集団の場合、「〇〇丸」と、船の名前が書かれているものが多かった。そこから、巻網漁船の船員さんたちの集団であると推察できた。彼らは神船を曳き、動かすことはあっても、世話人など祭りの運営

に携わることはない。しかし、彼らの力が本当の意味で神船を動かす原動力である。

最後に、御囃子の子どもたちについて述べておく。

御囃子は、もともと西・中・東にそれぞれ一つずつあったが、現在は一つに統合されている。その理由は子どもの数が減ったことに加え、「子どもの支度にはお金がかかる」ことがある⁽¹⁴⁾。御囃子は男子小学生、中学生から構成されているが、その衣装には華やかな着物を用意せねばならない。女物の着物であるというが、必ずしも女物とは限らない。いずれにしても派手で華やかな着物であることが条件であり、それを3枚用意することが必要であるという。当然、子どもに祭り用の晴れ着を3枚用意しようという家は、それなり以上に裕福であり、かつ祭りに対し思い入れある家庭に限定されてくる。こうしてみると、世話人として祭りに関わってきた家の子どもの数が必然的に多くなる。実際、現在の世話人の中には、子どもの頃に御囃子の経験がある人も少なくなかった。また、保存会長のM氏も孫を御囃子に参加させているとのことであった。

ところで、祭りにおける御囃子の子どもたちの出番は多い。朝早く、各町の総代や頭取を迎えに行くことから始まり、神社での神事における奉納、神輿の先導役をこなした上で、神船の渡御時には船に乗り込み揺すられながら演奏せねばならない。ほぼ祭りの始めから終わりまで、御囃子の子どもたちは出ずっぱりである。相当にハードなスケジュールである。しかし、何世代にもわたり、子どもたちはこれをこなすことを通して、祭りに親しみ、将来自分たちが祭りを担っていく土壌を培ってきたのであろう。この意味で、御囃子は、将来の世話人を育てる重要な文化伝承の装置と言える。

以上のように、祭りにおける役割の中に、大津港地区におけるそれぞれの位置づけが反映されてきたことがわかる。御船祭りは、いわば大津の社会の縮図であり、その歴史を凝縮し表出させるものであった。

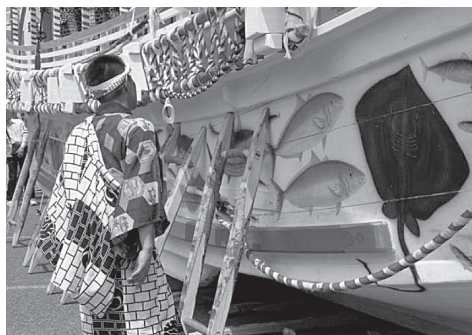


写真8 世話人の背中。浴衣の下には思い思いに華やかな衣装を着ている。



写真9 世話人の背中。富士に龍をあしらった衣装である。



写真10 女物の着物で着飾った御囃子の子ども（男の子）たち



写真11 潮垢離神事へ向かう御囃子の子ども（中学生）たち



写真12 祝い綱を引く人たちの背中も思い思いに意匠を凝らしている

3. 近代化と伝統の再構築

北茨城市において文化財保護条例が制定されるのは昭和49年4月である。これは市内に残されている文化財の保護保存を図ることを目的としたものであるが、同年5月大津の御船祭は13年ぶりに開催され、翌50年6月、市最初の県指定無形民俗文化財となっている。そして、昭和55年には、記録の作成を講ずべき無形民俗文化財「常陸大津の御船祭」として国の指定を受ける（市史下, 1987, 708）。

以上は市史の記述であるが、これによれば御船祭が昭和36～49年（1961～1974）の13年間、中断されていたことになる。ここでは、なぜ、この時期に中断されたのかを考えることを通し、現代における御船祭の社会的な意味づけの変化について考える。

そこで、まず、前章で示した水産業史と照らしあわせ、昭和36～49年がどのような時期であったかを検証しておく。

昭和20年代、戦前の大津港地区を支えた鰯漁は、戦後、不漁と近代化の出遅れによって大いに衰微する。市史には昭和30年代については漁業の状況に関する記述がほとんどなく、昭和40年代の近代化された漁業の状況に飛んでいる。港湾整備に関する記述から、かろうじて、この期間に大津港の港湾整備が行われるとともに、漁船の大型化などが進行したことが読み取れる。

インタビューにおいて、敢えてこの時期について尋ねることがなかったため、十分なデータはないが、保存会事務局長S氏の語りの中に、「日立などの会社に勤める人は、戦中から多かった。日立は軍需工場だった。また、昭和30年代後半には魚が上がらなくなり、日立に勤める人も増えた」というものがあった⁽¹⁵⁾。また、船大工のSさんによれば、船が木船からFRPに変わったのは、40年ほど前のことであるという⁽¹⁶⁾。これは、昭和44年頃のことになるが、小型船の近代化を意味するものでもある。

昭和30年代後半から40年代の前半にかけては、漁業の在り方も含め、その産業構造に大きな変化がもたらされた時期だったのであろう。設備面において近代化に対応できない漁業者は施網業者であれ、小型船業者であれ、漁業から去っていかねばならない。逆に、それに対応できるだけの資金があれば、より大型の新しい設備を導入でき、大量の水揚を得られる。その中で、船主は水産会社社長となり、季節労働の船員たちの番屋は消え、寮やアパートへと姿を変えていく。また、これに呼応し公共投資も多くなされ、港湾整備やあらたな港湾施設建設が次々になされ、港が姿を変えていった時期でもあるだろう。

さらにいえば、昭和30年代は北茨城市全体の中心産業であった石炭産業が、エネルギー革命によって急激に低落していく時期にもあたっていた。特に昭和30年代後半は、次々に炭礦が閉山していった（市史下、1987、599）⁽¹⁷⁾。こういったことをかんがみると、大津港地区ばかりでなく、北茨城市全体で、産業構造および就業構造の組み換えが起こっていた時期であった。

祭りが中断されていた背景として、ちょうどこの時期が産業ばかりでなくあらゆる組織の組み換えが行われ、人々の社会生活が急激に近代化する時期にあたっていたという説明で十分であろう。

事務局長のS氏は、「戦後、PTAが祭りに学校を休ませることを反対するようになった。昭和40年代後半に、公民館長が町民にアンケートを取り、日付の変更を行い、現在の日程になった」と語っているが、これは昭和49年に祭りを再開するにあたって行われたものであろう⁽¹⁸⁾。また、「祭は昔、大漁の年には連続して行ったこともあった。戦後復活させる時に、神社側とも話をし、5年に1回ということにした」とも語っているが、もはや施主たちの気分で祭りを行うような時代ではなくなったということでもあり、そのような施主もいなくなったということでもあるのだろう⁽¹⁹⁾。

御船祭は昭和49年5月に13年ぶりに行われ、翌年に県から無形民俗文化財の指定を受けるが、この時期に祭りをを行うことは翌年の国選無形民俗文化財指定を念頭に置いてのことであったと想像できる。それに先立ち、現代にふさわしい開催時期や日程、資金の集め方や運営方法などが検討されてきたのであろう。

このように見ていくと、御船祭が自分たちの社会の活きた文化としてではなく、自分たちの地域の守るべき伝統文化として意識され始めるのが、この時期であったことが理解できる。これは、守るべき伝統文化として意識しなければ維持できない時代状況の裏

返しであると同時に、御船祭の形式が伝統文化として固定化されることをも意味している。

なお、復活のために、世話人たちの間でどのような努力が行われてきたのかについては、今後の課題としておく。

おわりに

現在、御船祭の復興から、さらに35年が経過している。漁業者を中心とした海上安全、豊漁の祭りから、地域の文化伝統として市民に共有される祭りへの移行はある程度果たせたと言えるのであろう。その一つの例をあげるならば、西・中・東三町のうち、東の世話人のメンバーには勤め人が多くなり、PTA会長経験者が頭取になったこともあったようである⁽²⁰⁾。

西・中・東の三町のうち東町地区は、近年の住宅地開発によって一番空間的に広がった地域である⁽²¹⁾。西町、中町よりも必然的に、漁業関係者外の住人も増えることになる。このような変化を背景に、東町において漁業関係者外の住人が世話人に入るといようなことも起こるようになったのであろう。しかし、これは漁業関係者以外の新しい住人が、自分たちの地域の伝統として積極的に祭りの運営を担っていきこうとして生まれた現象でもある。この意味では、御船祭は、より広く市民の誇りとして定着したと言えるであろう。

ただ、そこにおいて一つ意味の移行がある。それはすなわち、御船祭は既にかつてのように地域社会統合のシンボルではなく、より広く緩やかに共有される地域アイデンティティのシンボルとなっているのである。それゆえにこそ、旧来の担い手との間における摩擦、祭りの在り方における真正性の議論なども起こりやすくなっている⁽²²⁾。

また、市民に共有される祭りへの移行を果たしたことの、もう一つの例としては、開催の度に10万人前後の人を集めることができる祭りに成長したことがあげられる。ある意味で有名になったわけであり、大津港地区とは関係のない地域の北茨城市民にとっても、北茨城の文化伝統の一つのシンボルとして捉えられるようになったと言えるであろう。しかし、ここにおいては、現代的な問題として、祭りを地域の資源として観光産業等に利用することを巡る問題などが当然発生してくる。たとえばそれは、祭りを見て評価する者と、祭りを実際に担う者の間の、祭りに対する思いの違いなどとして現れる。直接祭りに関わりがない人々は祭りを見世物としての素晴らしさで評価しがちであるが、祭りを担う当事者にとっては祭りが自分たちの粋や威勢、意地や思いの表現であることがその活力の源泉であり、迫力の源泉でもあることを知っている。同時に、現実には祭りを遂行すること、祭りを維持し続けることの困難さも知っている。こういった部分についてもより広く理解を促していくことが、本当の意味で北茨城市民の祭りとなっていくための、一つの課題であるのだろう。

注

- (1) 調査は2008年9月10日, 9月16日, 2009年2月16~17日, 3月7~8日, 4月11日, 4月19日, 4月25~26日, 5月2~4日, 8月9日, 8月13~16日の10回に渡り行い, 北茨城市産業農村部水産振興室, 大津港漁業協同組合, 常陸大津御船祭保存会, 大津じゃんがら保存会を訪ね, インタビューを行うとともに, 常陸大津御船祭, じゃんがらの二つの行事の練習・準備, 実施状況の参与観察を行った。
- (2) 2009年2月16日聞き取り。
- (3) 2009年2月17日聞き取り。
- (4) 2008年9月16日聞き取り。
- (5) 2009年2月16日聞き取り。
- (6) 2009年8月16日聞き取り。
- (7) 2009年2月17日, 3月7日聞き取り。
- (8) 2009年2月16日聞き取り。
- (9) 2009年3月7日聞き取り。
- (10) 2009年3月7日聞き取り。
- (11) 2009年4月19日聞き取り。
- (12) 2009年3月7日聞き取り。
- (13) 2009年4月11日聞き取り。
- (14) 2009年2月16日聞き取り。
- (15) 2009年2月17日聞き取り。
- (16) 2009年4月25日聞き取り。
- (17) 大津町が他の5町と合併し北茨城市となったのは昭和31年である。
- (18) 2009年2月17日聞き取り。
- (19) 2009年2月17日聞き取り。
- (20) 2009年4月11日聞き取り。
- (21) 市史には「大津地区の北部には, 昭和52年(1977)に設立された五浦土地区画整理組合によって, 20.6ヘクタールの地域に500区画の住宅地が造成され, 自然環境と遺跡保全の風致地区でとなろうとしている(市史下, 19878, 715)」と記述されている。この開発が十分な成功をおさめたかどうかはともかくとして, 東町は一番大きな空間的変容を遂げた地区である。
- (22) 2009年4月19日, 4月25~26日聞き取り。たとえば, 今回の祭りでは「町またぎ」(西・中・東の境界)を昔通りにきちんとした場所に置き直すことが一つの課題としてあげられていたが, 「今の人は, こういったことをほとんど知らない」というような嘆きもよく語られた。

参考文献

- 北茨城市史編纂委員会, 1988『北茨城市史 上巻』
北茨城市史編纂委員会, 1987『北茨城市史 下巻』

2. ポストモダン観光とポストモダン産業 —大洗町・北茨城市の観光研究の視点—

根橋 正一

1. ポストモダン観光への着目

われわれは、2009年度流通経済大学共同研究費補助金を得て茨城県北茨城市においてフィールド調査をおこなっている。このプロジェクトのスタートに先立って、2008年大洗町で聞き取り調査をおこなった。すなわち、2008年度の社会学部国際観光学科の科目、「観光研修＝観光調査実習」の調査対象地を大洗町として、観光をテーマにしたのである。この科目の受講者はわずかに1名であったが、訪問研究員（中国 華僑大学准教授 李洪波）、大学院生や研究室で研究していた市民の方、受講しない学生らも参加して興味あるデータを収集することができた。そのテーマは、観光の町大洗町は、どのような事情が重なって、どのような過程を経て観光の町になってきたのかを研究しつつ、現代および将来の観光の方向性を考えるのが目的であった。

大洗での調査は示唆に富むもので、様々な点に気づかされるものであったので、その秋9月には、県内の同様に海浜の町でありブルーツーリズムに取り組んでいる北茨城市役所を訪れてインタビューすることができた。こうしたなかで、気づかされたのは、現在の観光が、大正モダンの時期や戦後のモダン観光とは一線を画するポストモダン観光と呼ぶにふさわしいものに転換しているのではないかということであった。現代の観光はポストモダン状況におけるもので、近代的な観光とは一線を画するものであることを指摘したのはジョン・アーリ⁽¹⁾であるが、日本の観光を研究するわれわれもまた1990年代以来の日本のポストモダン状況のなかでその視点に着目する価値があるのである。

特に北茨城市が提案しているグリーンツーリズムやブルーツーリズムは、ポストモダン観光の典型となる可能性があると考えられる。市の計画書やその実現の過程は、十分ポストモダンを意識しているとは言えないにしても、様々な可能性と発見が期待されるフィールドであること考えられた。2009年度の一連の調査は、この町の文化や祭りをテーマにしてきたが、それを通して発見された知見は豊かで、われわれの研究を前進させるものであった。

本論文では、最初調査地大洗における観光地としての歴史について述べるとともに、ポストモダンの産業と観光について整理し、私自身の問題意識を述べることにしたい。2で大洗の観光の歴史について述べ、3でヨーロッパに始まるポストモダンの産業や観光について述べる。4では若干北茨城の提案に関して述べて、われわれの共同研究の方向性の一つを提示する。

2. 伝統的観光地としての大洗

近世における大洗の観光は、漁業、流通や信仰とのかかわりの中で形成された。

(1) 近世の観光地化—祝町の発展

近世の大洗は、太平洋に面し那珂川の河口に位置した地の利を生かして、漁業および舟運流通業の要地として発展するとともに磯前神社や願入寺、天妃社などの門前町としても栄え、さらに祝町遊郭が立地する観光地としての姿もみせていた。ここでは、漁業の発展、流通の発展、および門前町、遊郭の町としての発展の様子を概観しよう。

磯浜漁村の形成

戦国の混乱期が終わり、佐竹氏の時代になると城下町水戸の整備がすすみ、人口も増加し始めたので、大洗地方も魚類の供給地として活気を呈するようになった。元和から寛永(1615~1643)の頃、鯛漁業を中心とした上方漁法が磯浜に伝わり、鯛の大量が続いたため、多くの人びとが集まるようになり、17世紀後半までには海辺一带に多くの家々が建てられた⁽²⁾。

近世の鯛漁業の発展は、当時の農業と密接な関係にあった。元禄期(1688~1703)ころまでには近畿地方で綿作発展するが、このため肥料が金肥であったから干鯛の需要が急速に増大した。水戸領内の浜々でも干鯛・魚油・メ粕などの原料になる鯛漁業が発展し、商品は江戸や野州(栃木県)方面へ出荷された。磯浜村にも、寛文年中(1661から1672)以来、江戸の間屋から大阪方面積みになる干鯛を扱う諸国の商人がかなり入り込んでいた。近世後期になると、領内でも干鯛やメ粕などの肥料の需要が増大した⁽³⁾。

そのほか定置網漁、網繰網・八坂網を用いたり、鰹釣り、流網によるサンマ漁、章魚(たこ)船、姥貝船などがあった。文政期には鯖、鮫鯨が、天保3年(1832)には鮪の大漁の記録がある。地引網も盛んで、水戸藩主の頼房、光圀、斉昭が見分したという。磯場ではアワビ、ワカメ、ノリなど採鮑・採藻漁業も盛んであった⁽⁴⁾。

流通拠点としての大洗

17世紀初期から、仙台藩・岩城平藩・相馬藩・棚倉藩・三春藩などの東北諸藩や幕府大寒所などは、年貢米やその他の日常必需品を海上航路で江戸へ回送した。そのルートとして那珂湊からの内陸航路がとられた。すなわち、那珂湊に入津し、そこから涸沼川・涸沼を通過して海老沢で荷揚げし、下吉影まで馬で運び、そのあと巴川・利根川・江戸川などの内陸河川と陸路を接続して江戸へ回漕するルートであった。水戸藩もまた、那珂湊から江戸藩邸に向けて物資を送るのにこのルートを利用していた。さらに領内外の商人たちも、那珂川水運を利用して下野との連絡に那珂湊を利用して、干鯛・メ粕・

魚油・鰹節・塩物・干物などあらゆる商品を流通させた。安永5年(1776)那珂湊に入津した船が680~690艘、那珂湊から洄沼川へ入った船が900艘という記録がある。安永3年(1774)には、15万5,043駄、翌安永4年には13万6,603駄が那珂湊に入津したという記録がある⁽⁵⁾。これは全盛期の記録ではないが、いずれにしる相当量の船や物品を扱っていたということが出来る。さらに、多くの船乗りや商人たちが往来することになり、対岸の祝町にも多くの客をもたらしていた。

信仰と祝町

大洗はいくつかの寺社の門前町という側面も持っていた。さらにこのこととかかわりがある遊郭の町でもあった。ここでは磯前神社、願入寺、天妃社について概略を示す。

① 大洗磯前神社

大洗磯前神社は、文徳天皇の斉衡3年(856)に大洗磯浜に創建された。その後常陸国国司が朝廷に申請し、天安元年(857)に国が祭る神社である官社になった⁽⁶⁾。中世には繁栄を極めたものの、永禄年間(1558~1569)に小田氏知の乱により灰じんと化し、以後百数十年間海ぎわに小さな祠があるばかりであった。これを復興したのは水戸藩第二代藩主光圀であった。これにともなって式の祭礼も復活した。なかでも8月八朔(ついたち)の八朔祭はかなりぎやかに行われた。街中を神輿が練られ、その先頭には猿田彦神の面をつけた道案内がついた。宝暦のころ(1751~1763)まではあまり華美ではなかったが、明和・安永・天明のころ(1764~1788)になると華美になり、寛政期には永町の屋台が「道成寺」を演じるなど狂言・田楽・浄瑠璃などを、当時の名人が演じるなど競い合うようになった。文化・文政は特に華美になり、文政9年(1826)は前代未聞といわれるほどだった⁽⁷⁾。

② 願入寺

願入寺もまた光圀によって復興された。光圀は名利願入寺の再建のために、願入寺15世如高の一人娘を水戸城中に引き取って、養女とし、鶴子姫を名乗らせた。姫が成長すると、延宝元年(1673)東本願寺14世啄如の二男を婿に迎え、願入寺16世如晴(恵明院)とした。さらに光圀は翌延宝2年、朱印地300石を願入寺に寄進し、32名の寺侍を付け、毎年200両ずつ支給することとした。堂塔伽藍を岩船(大荒井町磯浜)に新築することとなり、延宝8年完成した⁽⁸⁾。

こうして光圀の後ろ盾によって願入寺は繁栄し、天保年間には、年々2,000両にも達するという遊女屋からの運上および祝町の地代、毎日1貫ずつになる渡船場空の収益があった⁽⁹⁾。

③ 祝町

延宝から元禄期にかけて願入寺が建設され、「祝町」「岩船町」と呼ばれるようになるまで、人口はまだまだ少ない土地であったが、元禄8年（1695）9月光圀から遊郭の建設許可を得て、遊女屋ができるに及んで、祝町も街並みが整い、人口が増えた。湊村に出入りする廻船の船頭や水夫たちが主な客であった。遊郭から願入寺の収益は500両とも1,000両ともいわれるようになった。祝町の家屋敷に課せられる税は免除され、願入寺のものとなった⁽¹⁰⁾。

元禄8年当初、妓楼は5軒であったが、後に7軒に増えた。これにともなって引手茶屋や芸者置屋など遊郭にはつきもののみせも営業を開始した。祝町が水戸城の丑寅の方向にあり、悪気が立つため、それを洗い除き人気を盛んにするために建てたということから、妓楼は「洗濯屋」とも呼ばれた。祝町遊郭の形態は京都島原を模したといわれ、藩公認の遊郭としてある程度の品位をたもっていたが、諸国の船頭や地元の漁師が多く、吉原のような上品さはなかった。水戸藩中の諸士の立ち入りは黙認されていた。

享保12年（1727）殺傷事件が発生し、遊女屋は許可が出てから33年間で廃止された。遊女屋以外の普通の茶屋は許可され続いた。その後、復活を望む声が強まり、願入寺や那珂湊の廻船業者が藩当局に働きかけたことにより、延享4年（1747）5軒が許可を得て営業を開始した⁽¹¹⁾。

④ 天妃社

元禄3年（1689）光圀は、祝町の願入寺の近くに天妃社を建立した。天妃神は、中国の海上安全の神媽祖（まそ）という女神で、寿昌山開基心越禪師が中国から持ってきたといわれる木像を、沖を航行する船の安全を祈るために、光圀が祭ったものだとされている。天妃社境内には、燈明が掲げられ、海上からの目標となり広く漁民や廻船業者などの信仰の対象となった。天妃社は年が建つとともに祭日の3月23～24日は大相撲や江戸歌舞伎の芝居が興行される賑わいとなった。寛政初期には相撲の谷風が、同4年には江戸の半四郎・菊之丞・彦三などが来たという。また、天保2年（1831）には俳優大谷広次が来て江戸芝居が興行された⁽¹²⁾。

中世の大洗

大洗地方は近世より名勝地として知られ、多くの藩主がここを訪れ、その風景をめめている。二代光圀は願入寺をしばしば訪れ、その桜をめでて詩歌の会を催し、沖の洲の御網場で地引網を見分した。五代宗翰は和歌に巧みな白井簾廉山をともなって大洗に遊び、六代治保もしばしば向洲で地引網を見分した。なかでも、九代斉昭ほど大洗を愛した藩主は居ない。天保4年（1833）には、少なくとも3月に4回、4月に2回、5月に1回、6月に2回大洗に遊んでいる。浜田を出発し、大串を過ぎて木下から大貫に入り、

中山備前守下屋敷を見てから、石田孫六の家に立ち寄り、波打ち際を大洗明神まで馬を走らせ、海女がアワビをとるのを見分し、あるいは涸沼川で川遊びをし、松波堀から船で那珂川をのぼるというコースをよくとった。海防対策の視察という面も強いが、休暇を充分楽しんだのであろう。斉昭が選んだ、水戸八景にこの一帯の「広浦の秋の月」「岩船の夕照」「湊水門の帰帆」の3つが登場する⁽¹³⁾。

(2) 近代的観光の形成—明治・大正・昭和

大洗の近代観光地としての発展は明治以来みられたが、大きく発展するのは大正期に全国的にみられた海水浴ブーム⁽¹⁴⁾と時を一にしていた。明治期は何軒かの旅館が、汽船でやってくる客をもてなしていた。本格的に近代的な大衆観光は起こってくるのは、大正期である。当時脚光を浴びた娯楽である海水浴に、鉄道に乗って人びとがやってきたのである。

ここでは、明治期、大正期、昭和期までの様子を整理しよう。

明治期

大洗磯前神社下には鳥居前町が形成されていた。観光客相手の料理屋「川崎屋」が建てられたのは慶応元年（1865）で、明治3年（1870）には旅館を兼業するようになった。同22年に尾崎紅葉によって「魚来庵」と名づけられた。23年には「金波楼」、33年には「大洗ホテル」が開業した。明治以降は、水戸から那珂川を汽船で下り、祝町から大洗にいたるコースで遊ぶ人が多くなった⁽¹⁵⁾。明治8年（1870）、石井藤助経営の那珂丸が水戸大杉山（水府橋下）と湊の小川（海門橋上）間を運行し始めると観光客の回遊も見られるようになったのである。祝町には明治中頃、妓楼5軒、置屋13軒、引手茶屋25軒、芸妓66人であったが、その後次第に衰退して、明治33年（1900）には芸妓56人、明治42年には29人に減った⁽¹⁶⁾。

明治22年（1889）水戸鉄道が水戸—小山間を運行し始め、上野から小山経由の寒梅列車が出ると水戸の寒梅客が増え、さらに明治29年（1896）には常磐線が水戸まで開通し、水戸の寒梅客は急増し大洗への客も増えた。明治28年には海門橋が開通し、祝町の交通の便が良くなったので、著名人の来遊も見られるようになった。明治31年（1898）には那珂川汽船会社が設立され、1日に14回から22回運行された。明治36年には涸沼川をさかのぼって大貫堀川橋まで運行するようになり、43年までその航路は続いた⁽¹⁷⁾。

大正期

大正期になると大洗の観光は、水戸の観梅、祝町の桜、夏の海水浴、修学旅行団体などで目覚ましい発展をみせた。那珂川汽船が始めた那珂川花火大会や祝町の天妃神社の祭礼、おいらん道中、大相撲の興業、明治末年に植えられた祝町の1,000本の染井吉野な

どが、衰退の一途をたどっていた祝町に季節的な活気を呼び戻した。那珂川湊のうなぎ料理も名物になっていた。

磯浜地区が海水浴場として有名になるのは、磯浜築港の失敗により堆積した港内が、海水浴場としての自然的基礎をつくりあげたからであった。観光客が集まるのは、水浜電車の開通によるところが大きい。水浜電車は、大正11年（1922）12月に浜田と磯浜間の軌道敷設が完成し開通した。これによって観光客や海水浴客が多くなり、土産店や旅館を中心に集落が形成されていった⁽¹⁸⁾のである。

この時期は大洗における近代観光の成立、発展期であったといえよう。

昭和初期

昭和2年には金融恐慌が起こり、4年には世界恐慌にみまわれ、水浜鉄道も例外に漏れず乗降客が激減した。だが、夏ぐらいい海にでも出かけて、日ごろの憂さを晴らそうとする一般庶民が海水浴に殺到した。昭和5年の「いはらき」新聞には次のような記事がある。

1万5千人もの人が浜遊びに出かけ、浜田に午後9時に来た人は、来る電車も来る電車も鈴なり満員で乗ることもできず、やっとお午近くなって曲松についた。

（大洗で遊んだ後、帰りも大変な混みようであった。）速度は、平均20、30キロで、祝町から水戸駅まで約1時間以上は、たっぷりかかった。⁽¹⁹⁾

このような海水浴客は夏の一時のことで、最盛期には150人の遊女がおり、磯節とともに全国に名を馳せた祝町遊郭ではあったが、昭和5年300年の歴史を閉じた⁽²⁰⁾。さらに同年中川汽船も廃業し、昭和8年（1933）には鹿島軌道も廃止に至った。こうして恐慌から戦争の時期には観光の火は消えたのである。

戦後の観光発展

戦後間もなく大洗の近代観光は復興し、新たな発展を見せる。昭和20年夏、日帰りの海水客で大洗は復活の兆しを見せた。昭和22年には、海水浴客は1日500人に上った。

昭和26年（1951）大洗から那珂港、常澄、茨城町の涸沼周辺を含む南北15キロメートルの地域が大洗県立自然公園に指定された。県は、昭和25年からポスターやチラシによる海水浴場の宣伝を開始していたが、県立公園指定のほかビーチパレス下の海岸に水族館の建設を開始し、27年に竣工した。これを機に、湊大橋の開通、大洗ゴルフ場の建設などをおこない、近代的な観光の町の姿を整えていった。表1は、大洗の観光施設の蓄積される様子を年表で示したものである。次々に観光に関連する施設が建設され、名実ともに観光の町へ発展していることが分かる。海水浴にかかわる施設ばかりでなく、ゴルフやヨットやボート、釣りなどととも、水族館や子供科学学館、マリントワーなどが含まれている。

表1 戦後大洗観光関連年表

年		観光施設関連事項
昭和26	1951	大洗県立自然公園（那珂湊・酒沼周辺）
27	1952	湊大橋開通・大洗水族館竣工
28	1953	大洗ゴルフ場完成
29	1954	磯原町と大貫町が合併して大洗町誕生
30	1955	夏海村を合併
34	1959	海洋博物館設立
43	1968	原研大洗研究所に「原子の火」ともる
44	1969	魚市場完成
45	1970	大洗こどもの国プール、水族館完成→夏の入場者5万人 簡易保険保養センター・かもめ荘・厳船荘・碧荘・国鉄保養所・公的保養所・民間企業の保養所などの施設
56	1981	大洗子供の国水族館新館完成
57	1982	磯浜・大貫海水浴場新浜へ移転
60	1985	大洗―北海道間フェリー就航
63	1988	大洗海浜公園完成・大洗マリントワーオープン
平成2	1990	大洗魚つり公園オープン
4	1992	大洗サンビーチキャンプ場オープン・大洗マリーナオープン
5	1993	大洗マリーナクラブハウスオープン 大洗町サイクリングターミナル新装オープン
6	1994	大洗港新フェリーターミナルビル完成
8	1996	大洗町観光情報センターオープン 大洗海岸「日本の渚・百選」に選定される
9	1997	大洗サンビーチにバリアフリービーチ開設
10	1998	大洗の海水浴場「日本の水浴場55選」に認定される
13	2001	大洗わくわく科学館オープン
14	2002	アクアワールド大洗リニューアルオープン
15	2003	大洗サンビーチ「水辺のユニバーサルデザイン大賞2003」大賞受賞
16	2004	大洗海の大学開校
18	2006	リゾート・アウトレットモール・大洗オープン

出典：『大洗町史』および大洗町商工観光課インタビュー資料から作成

（3）平成期―現代の観光地としての取り組み

1990年代後半からは、「日本の渚百選」選定、「日本の海水浴場55選」認定、「水辺のユニバーサルデザイン大賞」受賞といった評価を得ていることは注目される。この時期になると、全国的に観光地の差別化を図る動きが出てきており、それに評価されるような方策が整えられていることを示している。また、平成16年には「大洗海の大学」というユニークな取り組みがNPO法人によってスタートしている。これらは、1990年代以降出現している観光における新たな傾向を示していると考えられる。

表2は大洗における平成20年に開催されたイベントの一覧である。これを見ると、夏

の海の活動についてみても、かつてのような海水浴ばかりでなく、サーフィンの大会、ビーチバレーの大会、など多様な活動が行われていることが分かる。

こうした大洗においてみられる傾向は、戦後進んできた一連の近代（モダン）観光のあり方に生じている変化を映しているのではないだろうか。ポストモダン観光が始まっていると考えられる。

表2 大洗のイベント（2008年）

イベント名	時期	開催場所	主催者
ISU茨城サーフィンクラシック	5月9日～11日	アクアワールド大洗下海岸	茨城サーフユニオン
'08ビーチバレーIn大洗	7月26日～27日	大洗サンビーチバレーコート	茨城県バレーボール教会
大洗海上花火大会	7月26日	大洗サンビーチ	大洗町観光協会・大洗商工会
盆踊りの夕べ	8月3日	大洗マリントワー前芝生広場	大洗青年団体連絡協議会
大洗八朔祭（歩行者天国・磯節パレード）	8月23日～24日	大洗町内	大洗磯前神社・大洗商工会・大洗町観光協会
2008茨城ビルフィッシュトーナメント	8月30日～31日	大洗マリーナ	いばらきビルフィッシュトーナメントネットワーク
OARAI CUPサーフィン&ボディボード	8月30日～31日	大洗サンビーチ	大洗海の大学・茨城サーフユニオン・大洗ライフセービングクラブ
大洗の菊祭り	10月下旬～11月下旬	大洗磯前神社	大洗町菊花愛好会・大洗磯前神社
大洗あんこう祭	11月23日	大洗マリントワー前芝生広場	大洗町（大洗のまつり実行委員会）

出典：大洗町商工観光課インタビュー資料から作成

3. 観光におけるモダンとポストモダン

大洗の観光地としての動向を概観してみると、近代的な観光は日本の産業化の進展およびその動向によって影響を受けつつ発展したことを窺うことができる。そして、現代特に平成期の観光は、それまでの観光とは異なる傾向をもっていると考えられる。1990年ごろを境にして、ポストモダン観光への転換がみられたと考えることができる。この節では、ヨーロッパにおけるポストモダン観光の出現についての議論を整理するとともに、その背景となった産業のポストモダン化の動向について述べ、日本におけるモダンからポストモダンへの動向について述べることにする。

(1) ヨーロッパにおけるポストモダン観光

アーリは、その著『観光のまなざし』で観光に関する消費者側からの分析枠組みとし

で、フォーディズム型大量消費、ポスト・フォーディズム型個別化消費という2つの理念型を提案している⁽²¹⁾。前者は大量消費であり、大量生産という条件下で生産された商品の購買を意味している。各生産者が各自の産業マーケットを支配しようとする傾向を持っており、消費者に比して生産者が優位に立つ。流行や季節、特殊なマーケットの種類による商品の種別化は少なく、比較的選択幅が狭い。これに対して後者は、ポスト・フォーディズム型消費であり、生産よりも消費がどちらかという優位に立っている。このような消費側からみた観光は「古い観光」から「新しい観光」へのシフトという表現で、パッケージ型の規格品から分節し、柔軟で個人の希望にそったものへの移行であった。具体的に現れたイギリスにおける現象の事例について、「イギリスでは休暇キャンプ場はフォーディズム式行楽の典型的な例である。ポスト・フォーディズムへの移行のなかで、このようなキャンプ場は、今では〈センター〉とか〈ホリディ・ワールド〉などなどと名前を変えられて、自由の場としての紹介に努めている⁽²²⁾」。さらに第二章で、海浜リゾートの盛衰の歴史を扱っており、その4節「棧橋の終焉」で、観光におけるモダンからポストモダンについて次のように整理している。

イギリスにおける海浜リゾートの盛衰⁽²³⁾

最初の大衆観光は英国の産業労働者階級に発生したものである。海浜リゾート地は、19世紀の産業化の特異な一面であり、娯楽が大規模な産業労働者階級に基礎をおく社会のなかで組織化され構造化されるという新しい様式の成長から発生した。19世紀の都市の経済的、人口的、空間的変容のもたらした効果の一つは労働者階級の自立的な共同体を生んだことである。労働のパターンがより組織化され日常化されていくにつれて、それに対応する余暇の合理化を進めていこうという意向が出てきた。18世紀末から19世紀初頭にかけて、ある価値観の変容が出てきた。それはロマン主義運動と繋がっていた。力点が置かれる場所が、感動とか感覚とかの激しさに、また知的な明晰さより私的な神秘性に、さらに個性的な享楽的表現に移り変わってきたのである。このロマン主義の効能は、人は誰でも自然界に対して感動できるのだという暗示を与え、風景は喜びをもってまなざしを向けることができる何かであるという暗示を与えたことにある。ロマン主義には、振興の産業都市の住人たちは、そこから短期間でも離れて自然を眺めて時間を過ごせて、大いに得をするという意味が含まれている。19世紀の観光のほとんどは「海」とその健康付与のご利益との自然現象に基盤をおいたのである⁽²⁴⁾。19世紀は都市の労働者階級に、ロマン主義的な観光のまなざしが生まれ浸透し、まず海浜レジャーが流行したのである。

大衆観光の時代には前提条件として、交通が大幅に改良されたことがある。1830年代駅馬車があったが、次第に道路網の改善、鉄道の開通などが進んでいった。またトーマス・クックなどの観光会社の発展も労働者の観光を発展させる条件となった。海浜リ

ゾート地は巨額な投資がおこなわれ、ホテルや建物への個人投資、自治体の投資がおこなわれた。両大戦間、海浜リゾート地は順調に発展した。労働者に有給休暇が広く発達したからであり、その休暇の大部分は、海浜で過ごされ、家族は列車で、時にバスで運ばれていた。海浜はカーニバルのようなイベントで、騒音と雑踏の場となった。

戦後1950年代に海浜リゾートの急速な発展をみたが、1970年代、80年代に多くの場所で急速な衰退をみた。西洋社会で観光のまなごしに変容し、英国の海浜リゾートはそのまなごしの対象としてはあまり顧みられなくなったのである。リゾート地は、潜在的な観光のまなごしのたんなる大將軍の一つと化してしまっただのである。1920年代、30年代をリゾート地の盛夏だとすれば、1950年代と60年代はいわば晩秋である。

英国の海浜リゾートには普通、棧橋や展望台があるが、この2つの建造物は自然征服と「人の手になる」ものを建設しようという意図からできたもので、海と空を支配しようとするものである。自然を凌駕する人間の力と一体化し、人間の力を祝福するもので、観光のまなごしの一つとして理想的で、非日常的な性格を現していた。しかし、1970年代以降の20、30年に棧橋と展望等の非日常的な性格は劇的に衰退し、棧橋は海へ崩れ落ちつつある。また、海浜リゾートの第2の呼び物は遊園地もしくはレジャーランドなどの娯楽建築で、新しい乗り物が次々加えられてきたが、新たに登場してきた新しいスタイルの娯楽とテーマパークに取って代わられた。このようなレジャーランドは必ずしも海辺にあるわけではなかった。リゾートのもう一つの型は休暇キャンプ場であったが、その全盛期は終戦直後から1959年にかけてであった。1970年代、80年代までに、休暇キャンプ場は何か時代後れのものとなり、最新のコンセプトでつくられた休暇施設に対抗することはできなくなった。

ポストモダンとポスト観光

観光はモダンなものとして発展してきたが、ポストモダンの観光はポスト観光と呼ぶことができる。ポストモダンの展開は異なる社会階級の変化の分析と関係して述べられるべきものである。労働者階級の集団としての力が弱まり、〈サービス階級〉やその他の中流階級の力が上昇して、ポストモダン文化、とりわけ「ポスト観光」の大観衆が生み出されていった。この階級の特徴を整理すると、次のような点が指摘される。第一に、規模において相当拡大した階級であり、第二にこの階級は、経済資本というより文化資本に強く、たえず更新していく文化現象を多くの大観衆に与えている。第三に、比較的中心のない〈ハビトウス〉の所有者であり、第四に、比較的高度の文化資本を利用して、ブルジョア階級と労働者階級双方の不風流さを弾劾する。ブルジョアにはそのエリート主義を批判し、労働者にはその粗野、デリケートさの欠如を批判するわけである。西洋社会には、〈サービス階級〉とより広い相当のホワイトカラー層あるいは中流階級との両者が存在している⁽²⁵⁾。

モダンとは垂直分化によって特徴づけられる。すなわち、文化と生活の区分、ハイカルチャーとローカルチャーの区分、学術的あるいはアウラ芸術と大衆芸能の区分、エリート的消費と大衆的消費の形態区分が出現するのであり、したがってモダンは文化の過程として捉えることができる。一方、ポストモダンはその構造的特徴が〈脱分化〉であるような意味制度である⁽²⁶⁾。モダンは公衆を同質のマスとみなすことであり、観光についていうと、〈社会的に分化した場にいる〉人びとを好みも性格も分かちあえる、互いに似通ったものとして扱おうとする。この文化なき集団の一部として扱われることへの大衆の拒否、それがポストモダンの特質の一部である⁽²⁷⁾。

ポストモダンのサービス階級は、「本物」とか「自然」への傾向を持ち、田舎へ行くこと、田舎を保護することの両方に対する人気がある。田舎や文化遺産の伝統を一番気にかけている社会グループということになる。田舎の人気は、モダンの内容に対する幻滅から発しているところがある。特に戦後の大規模な都市再興をもたらした企てにたいする失望があり、田舎のロマン主義的なまなざしがある。これは田舎に対するポストモダンの姿勢とみることができる。これから連なるグリーンツーリズムは、次世代のための地域確保と、それに併せて野生生物の保護を確保する積極的な機能を持っている⁽²⁸⁾。

(2) グローバル経済におけるポストモダン

つぎに、アーリが論じたポストモダン観光の出現の経済的背景について検討する。モダンからポストモダンへの移行は、欧米においては1970年ごろであると考えられる。それは、豊かさや科学、経済発展を追求したモダンがもたらした人間疎外や自然環境の破壊、公害などの諸問題にたいする反省と批判を契機としていたのではなかったか。だからこそ、同時期に近代の豊かさの象徴であった大量生産大量消費の生産と消費、生活スタイルを可能にしたフォーディズム型生産、ポスト・フォーディズムへの転換、脱産業などの現象がいっせいに出現したのではないか。1960年代最後から70年代にかけて何が起こったのかみていくことにしよう。

リオタール、ボードリヤール、デリダなどのポストモダニズムの諸理論は一つの共通分母を持っている。すなわち、「啓蒙」への全般的な攻撃を有しており、したがってこの視座からの行動への呼びかけは、「啓蒙」こそが問題であり、ポストモダニズムがその解答である、とハートとネグリは論じている⁽²⁹⁾。「啓蒙」「近代性」への異議申し立ての目的は、白人的、男性的、ヨーロッパ的なものの優位性を維持することである。そして、2番目の伝統を攻撃しているのである。言い換えれば、ポストモダニズムの理論は、近代的主権の伝統に挑戦しているのである⁽³⁰⁾。

ネグリとハートはヨーロッパにおける労働者・学生運動を念頭におきながら、「1968年以降、私たちは新たな時代、新たな労働者階級の社会的、政治的構成の時代へと足を踏み入れた⁽³¹⁾」と論じている。すなわち、「労働の拒否」を訴えて、労働者の闘争と社

会闘争という新たな時代の社会関係を先取りする提案をおこなったのである。労働の拒否は次のような形で表明された⁽³²⁾。

- ① 大規模工業の規律や賃金体系に従属した労働への個人による拒否。
- ② テーラー主義的工場の抽象的労働とフォード主義的な社会関係のシステムに統制された欲求＝必要性の体制とが取り結ぶ関係に対する大衆的拒否。
- ③ ケインジアン国家が社会的再生産の法則の全般的拒否。

この新たな時代の「拒否」に対して資本の再構築の過程には、次のような3つの応答によって特徴づけられた⁽³³⁾。

- ① 個人的労働の拒否に対して、資本は工場にオートメーションを導入した。
- ② アソシエーション的な労働の共労的関係を切断する集団的拒否に対しては、資本は生産的社会関係のコンピュータ化を推進した。
- ③ 社会的な賃金規律の全般的拒否への対応として、資本は企業を特権化する貨幣のフローによって統制された消費の体制を導入した。

1960年代から70年代にかけての闘争を沈静化させ、指令を再編成するという任務を成し遂げるために、資本には2つの道筋が開かれていた。

第一の道筋は、抑圧的な選択肢であり、根本的に保守的な作戦であった。社会的な移動と流動性を管理することによって達成された。この戦略の中心的な武器は、生産のオートメーション化とコンピュータ化を含むテクノロジーの抑圧的な活用であった⁽³⁴⁾。それと同時に模索された第2の道筋は、抑圧を目指すものではなくプロレタリアートの組み立てを変化させること、そして、それによって生じた新たな実践と形態を統合・支配・利用することを目指すものである。

このシフトを理解するために、1960年代アメリカにおける諸運動の出現とその理念を整理しておくのが有用である。1960年代のアメリカ合衆国では、やる気のないアフリカ系アメリカ人は、可能な限りの手立てを尽くして労働を拒否した。若者は、工場と社会のうんざりする繰り返しを拒否して移動性と柔軟性からなる生活スタイルを創出した。学生運動は、知識と知的労働に高い社会的価値を与えるよう求めた。フェミニストの運動は、「個人的な」関係の中に含まれている政治的関係を明らかにし、また家父長的規律を拒否して、伝統的に女性の仕事とみなされてきた事柄の社会的価値を増大させた。これは、情動労働ないしは介護労働の高度な内容を含むものであり、社会的再生産に必要なさまざまなサービスを中心とするものであった。これらの運動の価値を示す指標、すなわち移動性、柔軟性、知識、コミュニケーション、協労、情動的なものが、今後数十年間の資本主義的生産の変革をいかなる仕方で規定するかを検討することになる⁽³⁵⁾。

こうしたヨーロッパおよびアメリカにおける諸運動が、資本のあり方を模索したのである。新しい世界のなかで、繁栄することのできる資本の配置は、労働力の非物質的、協調的、コミュニケーション的、そして情動的な新しい組み立てに適合し、またそれを

支配することを可能なものに、限られるのである⁽³⁶⁾。こうして、ポストモダンあるいは情報化の過程は、工業からサービス業（第三次産業）への労働力移動によって示されてきた。これは支配的な資本主義国、とくにアメリカにおいて1970年代初期から起こってきた転換である。サービスとは、健康維持から教育、金融、運輸、娯楽、広告にいたるまで、広い活動範囲にわたっている。そして、それ以上に重要なのはこれらの職業を特徴づける中心的な役割は知識、情報、情動、コミュニケーションにおかれているということである。その意味で、ポスト工業化の経済を情報化の経済と呼んでいるのである⁽³⁷⁾。

1970年代以降、サービス経済型モデルに向かう傾向はアメリカ、英国、カナダが先導している。特に金融サービスが支配的である。第2のモデルは情報産業モデルであり、日本やドイツがその典型である⁽³⁸⁾。こうした支配的な諸国における脱産業、工業生産の衰退につれて工業生産は実質上従属国へと移転された。こうした地理的な移行や配置換えを目にすると、支配諸国においては情動サービス経済が、最初の従属諸国においては工業経済が、さらなる従属国においては農業経済が主流であるという新しいグローバルな組織化が起こっている⁽³⁹⁾。欧米先進諸国で脱工業、サービス産業化がすすむと同時に、東アジア諸国が工業国として急速な発展を遂げ、「アジアの4小竜」とか「4タイガー」、「アジアNIEs (Newly Industrializing Economies (新興工業国))」などと呼ばれて注目された。日本と同様タイガー諸国も、その産業の多様化を図った。1963年から80年代半ばにかけて、韓国と台湾では化学、プラスチック、金属、機械、輸送設備といった重工業製品の生産高が向上した。同様の展開はシンガポールにおいてもみられた⁽⁴⁰⁾。

ところで、支配的な資本主義国、すなわち先進諸国の主要な産業となった非物質的労働とは、人間の接触や相互作用がもたらす情動にかかわる労働である。例えば、健康維持に関するサービスは主としてケア労働や情動にかかわる労働に依拠しており、娯楽産業も同様に情動を創り出したり、操作したりすることに焦点を合わせている。その労働は、安心や幸福感、満足、興奮、情熱といった感情であるという意味で非物質的な労働であるということが出来る。接触は娯楽産業におけるように現実的なものでも仮想的なものでもありうる⁽⁴¹⁾。

(3) 日本におけるポストモダン状況

日本の敗戦直後の経済回復は、労働集約的な軽工業を基礎としていたが、1960年代の初期さらに進んだ重工業への転換を図った。その産業分野は、造船、鉄鋼、化学、石油化学、機械製造などであった。特に消費者向け電気器具や自動車の大量生産には目覚ましいものがあった⁽⁴²⁾。

1960年代から70年代にかけて日本においても、学生運動や労働運動は教育改革運動、賃上げ運動、反公害運動などとして盛り上がりを見せ、政府や資本もまた真剣に取り組んだ。集約される問題点はやはり、反近代的な方向性を持つ、人間性を破壊する人

間疎外、自然環境を破壊し結果として人間を含む動植物を破壊する公害に対する反省と対応を模索する運動であった。この危機に対して日本は、科学技術と人びとに対する幸福感を提供することによって、さらなる工業化を推進することに成功した。ネグリらが分析したようにオートメーション化、コンピュータ化およびアンチポリューションテクノロジーの開発などにより、公害のないきれいな工業を国内に発展させることに成功した。また、労働疎外、人間疎外の問題に関しては、家族主義や余暇を流布することによって人びとに幸福感、充実感ややりがいを与えたのである。当時は日本的経営の家族主義、年功序列、終身雇用などもまた企業の成長と雇用者の労働を重ね合わせて満足感を与えることに成功した。1980年代初期、日本の産業はさらなる技術的飛躍の段階に入ったのである。産業のポストモダン化は、欧米のように進展することはなく、世界の工業国として発展を続けることになり、アジアNIEsとともに世界の工場となった。ポストモダン的な産業再編は、1990年代バブル経済の崩壊以後本格的になるというのが日本の状況である。

観光、あるいは余暇や娯楽に関してみると、フォーディズム型の大量生産大量消費の生活スタイルを実現する巨大リゾートが計画、開発され、一時話題になり大きな集客力を見せながらその多くが失敗することになった。1985年、筑波で最先端の科学技術、工業技術を謳歌する科学万博が開催される一方で、東京ディズニーランドがオープンした。それらは日本が進む2つの道筋を暗示していた。すなわち、産業場面におけるオートメーション化やコンピュータ化を実現する科学技術の展示であり、人びとにさらなる科学技術の可能性を示し、産業発展のイメージを伝えていたのである。他方ディズニーランドは、アメリカの産業再配置の過程で新たに成長してきた娯楽産業の日本進出であった。この新しい娯楽産業はテーマパークと総称され、日本版のテーマパークはまるで雨後の筍の如く建設されることになった。公的資金および民間資本が競って投資したテーマパーク施設は、厳しい評価にさらされることになった。日本のテーマパーク産業への投資家たちは、アメリカの産業再編のなかでなぜ、どのように娯楽産業がその位置を占めることになったのか、その中でもディズニーランドがなぜトップ企業になりえたのかについて十分に認識していなかったのではなかったか。結局、ディズニーランドのように高評価を得て、生き残ったのはそう多くはない。日本もまた、産業におけるポストモダンの再配置およびポストモダン観光を構想する時期になっていたのかもしれない。

そうしたなかで日本のバブル経済の破綻はやって来た。日本もまた、20年前に欧米が体験した脱産業社会への転換、産業再編成を進める時期が来たのである。そんななかで、グリーンツーリズムへの注目や世界遺産への関心の高まりが起こった。これらはポストモダン観光を構想する大きな柱であったといっていよう。

1972年国連のユネスコによって、人類に共通する普遍的な資産として文化遺産、自然遺産を保護するために「世界遺産条約」が成立し、欧米を中心に多くの国が参加したが、

日本がこれに参加するのは1992年であった。また、1970年、ヨーロッパ各国で始まったグリーンツーリズムが、日本で注目を集めるのは1990年代になってからであった。本来世界遺産の保護は、観光資源の保護や観光地開発とはまったくかかわりのないものであったが、1990年代に日本や他のアジア諸国が観光開発目的に世界遺産を活用する視点を持ち込んだのである。1992年農林水産省のグリーンツーリズム研究会の中間報告書「グリーンツーリズムの提唱―農山漁村で楽しむゆとりある休暇を」で、人びとの目に触れて以来、全国各地でさまざまな取り組みがなされてきた。それはいずれも、大量生産大量消費の余暇活動でもないし、巨大な近代的な施設を建設するものでもなかったのである。いずれにせよ、こうした新たな取り組みは日本的なポストモダン観光の流れを形成しつつあるということができよう。

1970年代欧米で始まったポストモダン産業やポストモダン娯楽、観光は、それから20年の時間を経て1990年代に日本にも及んだといえるのではないだろうか。しかしそのあり方は欧米と全く同じというわけではないだろう。アメリカ生まれの娯楽産業であるディズニーランドは日本でも成功を続けているが他方、日本には独自の温泉文化の伝統を生かして成功している観光地も少なくない。われわれは、ポストモダン観光に焦点を当てて研究を進める必要がある。

4. 北茨城におけるグリーンツーリズムおよびブルーツーリズム

ポストモダン観光を研究する場合、注目するに値するテーマは多様である。例えば、ディズニーランドというテーマパークの研究、グリーンツーリズム、世界遺産、観光景観、エンターテインメント産業やスポーツ産業、ブランド商品などの消費などである。このうち私は、地場産業とグリーンツーリズム、ブルーツーリズムに焦点を当ててフィールド研究を構想したい。茨城にフィールドを求めて、観光と地域をテーマにした研究の対象として最も可能であるし、有用な研究になると考えられるからである。グリーンツーリズムは何よりも日本独自の展開があり、欧米との比較は興味深い課題である。すなわち、日本の農業や漁業に関する文化、日本人の生き方や空間の作り方、それらを反映する祭りのあり方など、総合的な研究への発展が予想される研究であるからである。

茨城県内でグリーンツーリズムやブルーツーリズムに積極的に取り組んできたのは北茨城市であった。われわれは、2008年秋に北茨城調査を開始することになった。9月9日に市役所を訪問し、観光事業の一環としてグリーンツーリズムに取り組んできた経緯や、それに続いてブルーツーリズムへの考え方について聞いたのが最初であった。

市の計画によれば、地場産業の振興と新たな産業の育成を図る観点からグリーンツーリズムとブルーツーリズムの推進に取り組んでいる。グリーンツーリズムに関しては平

成8年（1996）から取り組みを始め、平成12年にはその中核拠点となる「総合交流施設マウントあかね」をオープンし、さまざまな活動を展開している。加えて、平成16年（2004）から着手し、平成19年5月1日、その主要な施設となる北茨城市漁業歴史資料館「よう・そろー」を開館した。

北茨城市は県の北東部に位置し、福島県と境を接している。東西24キロメートル、南北22キロメートル、総面積186.49平方キロメートルで、その大半は阿武隈高地が占め、平地はその東麓を形成する海岸段丘に位置している。長い砂浜と防風林の美しい景観を示しており、県境に近い五浦海岸には岡倉天心ゆかりの日本美術院旧跡があって自然景観保全が行われている。北西部の花園溪谷は新緑と紅葉の美しさで知られ、花園花貫県立自然公園に含まれている。この山間部における自然環境と農村文化を活用したグリーンツーリズムと臨海部における自然環境と漁村文化を活用したブルーツーリズムの二つが結合した滞在型余暇活動の推進を通じた既存産業の活性化と異業種連帯による新産業の創出が目指されている⁽⁴³⁾。

ポストモダンの観光として位置づけられる可能性のあるグリーンツーリズムについて、この構想を事例として計画とその実現の様子を調査研究することとした。その際、産業や文化、観光のモダンとポストモダン、伝統的な生活文化や信仰の現代の文化や生活スタイルとのかかわり、モダンとポストモダンの空間的、地理学的視点から研究などを重ね合わせて、学際的に行うこととした。

注

- (1) Jhon Urry, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage = 1995年, 加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版社
- (2) 大洗町史編さん委員会編, 昭和61年, 『大洗町史（通史編）』275ページ
- (3) 同上書, 297ページ
- (4) 同上書, 300～302ページ
- (5) 同上書, 367～369ページ
- (6) 同上書, 212ページ
- (7) 同上書, 342～354ページ
- (8) 同上書, 317～318ページ
- (9) 同上書, 326ページ
- (10) 同上書, 329ページ
- (11) 同上書, 334～337ページ
- (12) 同上書, 329ページ
- (13) 同上書, 315～316ページ
- (14) 海水浴観光については東美晴の論考がある。「明治期におけるリゾートの形成—海水浴の普及課程に着目して—」『流通経済大学社会学部論叢』第15巻, 第1号, 2004年。東美

晴・小峯力「日豪の海浜におけるレジャー空間形成の比較文化—ブルー・ツーリズムの構築に向けて—」『流通経済大学社会学部論叢』第18巻, 第1号, 2007年。

- (15) 大洗町史編さん委員会, 前掲書, 85ページ
- (16) 同上書, 798ページ
- (17) 同上書, 799ページ
- (18) 同上書, 86ページ
- (19) 同上書, 695ページ
- (20) 同上書, 677ページ
- (21) Jhon Urry, 前掲書, 25ページ
- (22) 同上書, 26ページ
- (23) 同上書, 第二章
- (24) 同上書, 29~37ページ
- (25) 同上書, 156~158ページ
- (26) 同上書, 149~150ページ
- (27) 同上書, 155ページ
- (28) 同上書, 170~179ページ
- (29) Michael Hardt & Antonio Negri, 2000, *EMPIRE*, Harvard University Press = 2003年, 水嶋一憲他訳『〈帝国〉—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社, 186ページ
- (30) 同上書, 189ページ
- (31) Antonio Negri & Michael Hardt, 1994, *Labor of Dionysus: A Critique the State-Form*, Regent of the University of Minnesota = 1008年 長原豊他訳『ディオニソスの労働—国家形態批判』人文書院, 350ページ
- (32) 同上書, 350ページ
- (33) 同上書, 351ページ
- (34) Michael Hardt & Antonio Negri, 前掲書, 347ページ
- (35) 同上書, 355~356ページ
- (36) 同上書, 358ページ
- (37) 同上書, 369ページ
- (38) 同上書, 370ページ
- (39) 同上書, 370ページ
- (40) Robin Cohen & Paul Kennedy, 2000, *Global Sociology*, Palgrave Publisher, = 2003年, 山之内靖訳『グローバル・ソシオロジー I 格差と亀裂』平凡社, 222ページ
- (41) Michael Hardt & Antonio Negri, 前掲書, 377ページ
- (42) Robin Cohen & Paul Kennedy, 前掲書, 221ページ
- (43) 茨城県北茨城市『北茨城市ブルー・ツーリズム基本計画書』2001年

3. 「異文化としての日本」—伝統の対象化と変容

高橋 巖根

私は2004年から大学の非常勤講師として教壇に立つようになり、文化人類学・民俗学といった科目を担当し、本学では2007年より専任教員として宗教学とイスラム学を教えている。授業の中では、日本の過去の文化や外国の文化について扱うことが多い。最近の学生は、私の学生時代と違って退屈な授業を許さないから、どのように教えたらいいかと考えることがよくある。そうした中で、最近の学生には異なる文化に対する感性が不足しているのではないかと感じることもある。

私が学生時代を過ごした1980年代は、「国際化」の時代と言われた。1970年代までに高度成長を終えた日本が、次に目指した目標が国際化であった。1980年代に入り、経済的に豊かな日本を目指して大量の外国人労働者が流入し始めるとともに、海外旅行や日本企業の海外進出という形で日本人が外国を訪れることが日常化した。そうした接触の中で、ときに「顔のみえない大国」、「一国繁栄主義」などと批判されながら、国際化と国際貢献を質的に深化させていくことが目標とされた⁽¹⁾。

1990年代に入ると、国際化に加えて「グローバル化」という言葉が使われ始めたが、国際化ないしグローバル化に逆行するような傾向も見られるようになった。1980年代の国際化は当時の日本経済の好調に支えられた面が大きかったが、1990年代初めのバブル崩壊により経済が一転不振に陥るにつれて、日本人の意識は内向していった。

そうした風潮は、若者の海外体験にも影を落としている。1980年代は大学生の卒業旅行が一般化した時代であり、学生のうちに海外旅行や外国生活を体験しておくことがある種の通過儀礼のように受け止められた頃でもあった。それに対して、最近では、若者が積極的に外国に行きたがらない、旅行をする時でも自分で計画を立てるのではなく、バック旅行に頼る者も多いなどと言われている。確かにこうした傾向はあるが、それがすべてではない。外国の社会や文化に関心を持ち、様々な形で海外旅行・外国生活を体験しようとする若者も決して少なくない。問題は、若者の間の分極化である。これは、海外体験に限らず多くの事柄について言えることだが、今の若者には他者に対する意識が希薄である。ここで「他者」というのは、外国人ばかりではなく、同国人も含めた自分の周囲の人間関係をも含んでいる。日ごろゼミの指導をしていて痛感するのだが、1つのゼミに15~20人程度の学生がいるとすると、3つの程度の仲良しグループに分かれてお互いあまり交流をもととしない。ゼミの中に留学生がいると、留学生だけで一つのグループが形成されてしまい、同じ教室で時を過ごしているのに話をしたことがない、ひどい場合には名前もわからないということがある（これではよくないと思い、近頃は意図的に、日ごろ交流のない同士を組み合わせて何かと一緒に取り組ませるとい

ことを繰り返し行っている)。つまり、自分の身近にある人間関係ですら非常に限定化され極小化している。そうした中で、海外に興味がある学生は興味があるが、そうした姿が他の学生に影響していくということはあまりないのである。

自分を中心とした世界の極小化という現象は、学生の過去に対する意識にも現れている。現在、大学に通っている学生の大半は1980年代以降の生まれである。これが何を意味するかと言えば、日本が貧しかった時代を全く体験したことがないということであり、現在の日本の社会がどのようにして築かれたのかということについて知らないということである。わずか2～3世代前の人びとが知っていた文化や生活実感というものが分からなくなっている。そうした彼らは、古い日本の伝統文化よりも西洋由来の文化のほうに親しみを感じることも少なくないようである。端的に言えば、妖怪や狐狸・異形よりもハリリー・ポッターや『ロード・オブ・ザ・リング』などの古代・中世ヨーロッパの神話的世界に興味を覚えるのである。

通常、こうした今の若者の姿は否定的に描かれることが多い。その背後には「私たちの世代はしっかりしていたのに、今の若者は情けない」という意識がどこかに隠れている。しかし、私は必ずしも、今の若者の現状を否定的にばかり捉える必要はないのではないかと考えている。言ってみれば、今の若者にとっては日本の伝統文化は外国文化と同様「異文化」なのである。日本の昔の文化とはこういうものであると教室やメディアによって教えられるような自分たちの文化としてではなく、見慣れないものとして自文化を「異化」⁽²⁾し異文化として捉え直し、そこに新鮮さを見出していくということが可能ではないだろうか？

考えてみれば、現在の中老年代でもかつての日本文化について実感をもって語ることのできる人間はさして多くないであろう。そうだとすれば、自分は日本の文化を知っているという自文化意識にこだわるのではなく、むしろ積極的に「異文化としての日本」を愉しむほうがよいのではないかと思う。そうすることで、若者世代との共通性を共有することも可能になるとも言える。

そもそも文化を対象として認識することの前提には、文化を対象として見ている自己は対象とされる文化から切り離されているという条件がある。これは、(よく言われるように)異文化に関してだけでなく、自文化に関しても言えることである。日本の伝統文化に関して言えば、その歴史は意外に古い。

江戸時代の半ば以降、江戸を中心として大量の「地誌」・「民俗誌」と呼ばれる地方の地理や民俗に関する出版物が発行されている。地誌・民俗誌が大量に発行された時代は、ちょうど江戸のまちが都市として成熟し、その住民が「江戸っ子」と称して自らのアイデンティティを確立した時代でもあった⁽³⁾。江戸のまちは戦国末期から江戸時代の初期にかけて約70年もかけた大改造の末作られ、その後も多くの流入人口(とくに、関東地方からの農民たち)を受け入れて膨れ上がり、江戸時代中期には当時の世界でも

有数の百万都市に成長していた。新たに入ってきた人口のほとんどは近郊の農村などから流れ着いたもので、彼らは江戸の都市社会の下層民を構成するようになった。彼らは、中世以来の江戸の住民でもなく、家康入府以降に東海地方や上方から来た人びとでもなく、そうした人びとに比べれば新参者であった。そんな彼らであっても、「三代住めば江戸っ子」と言われるように、江戸に住んである程度経てばそのまちの人間だと胸を張って言えることは魅力的であった。

しかし、彼らは自分たちが捨て去ってきた故郷の民俗世界を無意識のうちに懐かしんでもいた。そうした彼らの心情に応えるかのように、日本全国各地の民俗を紹介した地誌や民俗誌が数多く出版され、庶民に読まれるようになっていたのである。彼らがそこまで故郷を懐かしんだのは、江戸下町の町人としての暮らしが悲惨であったからである。彼らは、山の手に住む武士階級に比べ圧倒的に狭い土地に押し込められるように暮らしていたうえ、碁盤の目状に分割された街区の中で町奉行所やそのスパイによって始終監視される境遇にあった。そうした世界にあって、人びとは生の不安にさいなまれていた。

そうした不幸な世界における希望は、故郷の民俗というユートピアであった。「いま私たちはここでこんな落ちぶれた生活を送っているけれども、もとはと言えば、幸福で満ち足りたあのふるさとから出てきたのであり、いつだってそこに還ることができるのだ」。彼らはそう考えて、日々の生活に耐えていた。だから、地誌や民俗誌に記述された地方の民俗とは、現実の地域社会の様子をそのまま描いたものではなく、孤独な都市の人びとの心を満たすためのイメージでもあるのである。

例えば、越後（新潟県）の民俗誌に『北越奇談』や『北越雪譜』というものがあるが、これらはいずれも地方の民俗誌家が江戸の文人の助けを借りて出版にこぎつけたものである。その際、江戸の文人らは江戸の人びとの好みに合うように校訂や補筆を行っている。

この二つの民俗誌の中には、多くの「山人」（山の民）が登場する。そこでは、山人は人間のものであって人間ではない異人として描かれている。『北越奇談』のあるエピソードに描かれた山人は、恥じらいや寒さを知り人の言葉を解するという点では人間的だが、自ら言葉を話すことはできない。

また、『北越雪譜』には、逃入（にごろ）村という不思議な村に関するエピソードが載せられている。小千谷から一里ほどの山あいには逃入村という村があり、そこには藤原時平の墓と伝えられる塚があった。また、この村には手習いをすると祟りがあるという言い伝えがあり、村人は文字が書けず、必要な時には他村の者に頼んで用を足している。

ここに山人や逃入村のイメージを借りて描かれているものは、純粋な日本文化という観念である。山人は自ら言葉を話せないで、コミュニケーションを通じて他者によって汚染されることはない。逃入村の人びとは、菅原道真と敵対していた時平の墓を守りながら、道真が体現していた外来中国文化の象徴である漢字という文字を知らない。こ

の話が書かれた江戸時代中期は国学が盛んになった時代でもあり、民俗誌と国学という後の日本民俗学の二大ルーツがここで一つになっていると見ることもできる。

一方、明治時代以降の近代を迎え、伝統文化は大いに変容していく。柳田國男は、その様子を酒という事例を通じて生き生きと描いている⁽⁴⁾。江戸時代までは、酒は主として祭りのときに飲むもので、そう気軽に飲めるものではなかった。主な祭りの時期は年に二回あり、ひとつは秋祭りで、この時は収穫直後で時間がないため一週間程度でできる簡単なものを飲んだ。これに対して正月の酒は、大家（たいけ）が秋から準備し丹精したものを、一同を集めて振る舞うものであった。正月の酒は旧家の誇りであり、家刀自の苦心の賜物であった。家伝で伝えられた技倆の成果が試されるのであり、「どこにもないというような佳い酒が、時々はある旧家の名声を高めていたのである」。

この時代、どぶろくを手作りの酒として造り、それを神に捧げる祭りをを行う地域も少なくなかった。愛知県大府市にある長草天神社のどぶろく祭りは、その様子を今に伝えている伝統行事のひとつである。現在では祭りは毎年2月に行われているが、そこで用いられるどぶろくは、祭りの約1カ月前からその年担当の酒元組の人びとによって丹精されている（とりわけ、発酵の際の温度管理が難しいようである）。造られた酒は、祭りの当日神に捧げられ、祭りの関係者によって賞味された（直会の儀）のち、一般参拝者や露天商らにも振る舞われる（大道施行）。つまり、土地の恵みから造られた酒を神と人間たちで分かち合うという神事と祭りの基本的性格がここにもよく表されている。

だが、明治時代を迎えると、日本人の酒の飲み方は急速に変わっていく。「灘酒」のような大量生産の酒が普及し、「貧富の間に均一に消費せられている」⁽⁵⁾。この大量生産の酒は多くが壺詰めされている。「中が見えるだけその刺戟はたしかに多い。飲んだ時の喜びは少しでも増加せずに、飲めない日の苦しさがだんだんに忍びがたくなって来た」。そこまでして人びとが酒を口にした大きな理由が、酒がもつ社交性であった。明治時代の初め、中央集権国家が創られるようになったことで、各地から人材が集められるようになった。しかし、人びとはまだそれぞれの出身地域の文化を色濃くもち、お互いによそよしい関係であった。そうした人びとが一つの職場の中で一緒に働くことを求められたのである。その際に親睦のために使われたのが、いわゆる仕事の後の一杯であった（社交のために酒を浴びるように飲むという習慣は、もともとは幕末の志士たちに由来するようである）。

一方で、地造りのどぶろくは次第に駆逐されていく⁽⁶⁾。どぶろくは1877（明治10）年から課税対象とされ、1883（明治16）年には免許制とされるが、密造が止まなかったため1899（明治32）年には醸造そのものが法的に禁止されるに至る。しかし、その後も密造を続ける一部地域の人びととそれを取り締まろうとする官憲との間には時に死闘が繰り広げられることもあった。1916（大正5）年には秋田県河辺郡船岡村で、どぶろくを対象とした捜査をきっかけにして税務署員が村人に襲われるという凄惨な事件が発生

している。この時、税務署員らが抜き打ち臨検と称して30戸ほどの同村の捜査を行ったが、どぶろく造りの証拠を発見することはできなかった（実際にどぶろく造りが行われていたかどうかは不明）。思ったような成果があがらなかった署員らは腹いせに近くにいた農婦にいいがかりをつけこれを拉致した。それを知った村民らは、村内の人間が外部の「よそ者」によって辱められたと受け止め、村の慣習法に基づく制裁を決議した。そして、30名以上の村人が鎌や鉞で武装し番傘で顔を隠したいでたちで集まり、隣村から帰る途中で神社付近にいた署員らを襲撃し、4名に重傷を負わせた。この事件に見られるように、当時は村の慣習法が生きていた時代であり、その力は国家権力に劣らないものと認識されていた。

ここまで見てきたように、日本の民俗文化は江戸時代中期以来、対象として切り離され「文化化」されたうえに、明治時代以降の近代化の中でとりわけ国家権力により大きな変容を強いられてきたと言える。北茨城市大津港地区の場合、どれだけのことが言えるのかまだわからないが、伝統文化をいかに異化するかということが地域観光の可能性を示すのではないかと考えている次第である。

注

- (1) 加藤哲郎, 「戦後日本政治と国際化6 国際化と政治」: <http://homepage3.nifty.com/katote/Kokusaika.html>
- (2) 「異化」とは、見慣れた日常的なものを見慣れない非日常的なものに変える作用のことで、1920年代のロシア・フォルマリズムで使われた用語。ロシア語では「オストラネーニエ (ostranenie)」という。1970年代の象徴人類学の旗手であった山口昌男が、自著の中で盛んに使った概念のひとつである。
- (3) 櫻井進, 『江戸の無意識』, 講談社現代新書, 1991年
- (4) 柳田國男, 『明治大正史 世相篇』「第七章 酒」(所収: 『柳田國男全集26』, ちくま文庫, 筑摩書房, 1990年)
- (5) 同上。
- (6) 川村邦光, 『“民俗の知”の系譜—近代日本の民俗文化』, 昭和堂, 2000年